魔法少女
アルフェリカ
＃1
小説：端音 乱希
挿絵：有魚
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

目次

目次・登場人物紹介	P2
本編	P3～P51
あとがき・奥付	P52

登場人物紹介

●魔法少女アルフェリカ

『星』の異名を持つ、最も古参の魔法少女。
仲間たちを率いて、
長い間エビルズアークと戦っていたが、
アーク・デュランに止めを刺す寸前で
異世界への逃亡を許してしまう。
エビルズアークとの戦いに決着をつけるため、
単身異世界への転移を決意する。
重力操作や、物体の重さを変える魔法が得意。

●アーク・デュラン

「エビルズアーク」の首領。アルフェリカ達に追いつめられ、
一時は仮死状態になっていたが、収集した魔力で復活を果たす。

●ルカンダ

アーク・デュラン配下「四魔将」の１人。
女性型で悪魔のような外見をしている。
相手に様々な効果を付与する〝紋様〟を刻むことができる。

●Dr.バルド

アーク・デュラン配下「四魔将」の１人。
白衣を着た科学者風の男。人々から集めた魔力を用いて、
人工生物である「バイオ兵」や「怪人」を生み出す。

●グリーヴァ

アーク・デュラン配下「四魔将」の１人。
体がスライムで構成された魔法生物。

魔法少女アルフェリカ　第１話　高潔な魔法少女を汚す民衆の欲望

1

「これで、終わり……！」
「いっけええぇぇぇぇぇっ!!」
５人の魔法少女が力を合わせて放った一撃が、アーク・デュランの体を構成する触手の大半を吹き飛ばした。
エビルズアークの本拠地である居城の最上階を、轟音と震動が包み、煉瓦でできた壁や天井を吹き飛ばす。爆発の余波でアーク・デュラン配下の四魔将も吹き飛び、床に転がった。
「はぁ……はぁ……ついに、やった……」
「まだよ、油断しないで」
勝利を喜ぼうとした、『空』の魔法少女を、私はたしなめる。〝魔王〟アーク・デュランは触手の集合体だ。一切れでも触手が残っていれば、完全に倒したことにはならない。
「そうよね、ごめん、アルフェリカ」
「いいの。確実に止めを刺しましょう」
私は他の４人の魔法少女と視線を合わせ、意思の疎通を図りながら、倒れているアーク・デュランを包囲するように接近していった。
床に横たわる薄汚れたローブ。ローブの内側が、怪しく蠢いている。わずかに残ったアーク・デュランの肉片……これを消滅させることができれば、我々の勝利だ。
「おのれ、魔法少女ども……我をここまで追い詰めるとは……」
低い声が周囲に響く。触手同士の振動により生成された、アーク・デュランの声だ。
その声は弱々しく、既に瀕死のようだった。先ほどは油断するなと仲間に警告したが、もう抵抗する力は残っていないように思える。
「多くの民を苦しめてきた報いを受けなさい」
私はステッキを構える。最後の一撃を叩き込み、この世界に平和を取り戻すために。
だが、私達の行動は１歩遅かった。
「……！」
突如、アーク・デュランの背後の壁に、円状のゲートが出現した。円の内部には光輝く粒子が流れており、どこか別の場所と繋がっているように見える。
「これは……」
「覚えていろ、魔法少女ども……我は必ず、この世界に帰ってくる……その時はお前達を、１人残らず嬲り殺しにしてくれる……！」
アーク・デュランはそう言い終わると、最後の力を振り絞るようにして触手を伸ばし、周囲に倒れる四魔将の体を掴む。その直後、アーク・デュランと四魔将は、ゲートの中に吸い込まれ、消えてしまった。
「な、っ……!?」

突然のことに、私達は対応できなかった。唖然としながら、ゲートを見つめる。
（ここまで追い詰めたのに、逃がしてしまった……？）
空間転移の魔法だろうか？　ボロボロになったアーク・デュランに、まだこのような魔法を使う魔力が残っていたなんて、思いもよらなかった。
（油断していたのは、私の方だった……）
だが、後悔しても遅い。宿敵は、既に消え去った後だ。
その時、目の前のゲートが徐々に狭まり始めた。転移の魔法の効果が、消えようとしている。私を含めた5人の魔法少女は一斉に床を蹴ると、円の内部にステッキを差し込んだ。
中央にいた私のステッキは、円の真ん中に差し込まれただけで特に意味を成さなかったが、両側にいた４人の魔法少女が差し込んだステッキは、円の外周部分と交錯した。
バチィ、と、円とステッキが触れている部分に火花が散る。私以外の４人のステッキにより、円が小さくなるのを押し留めている形だ。
「これ、長くは、持ちませんね……」
『花』の魔法少女が、ステッキを持つ手に力を込めながら呟く。４人の力を合わせても、この状態を長く維持することは難しいようだ。
（だったら……）
私は迷わなかった。
「私がアーク・デュランを追う」
４人が円の大きさを維持している間に、私がこの中に入る。それしか手段はない。
「ちょっと待って。これがどこに繋がっているのか、分からないのよ。危険すぎる」
『空』の魔法少女が警告する。
「分かっている。けれど、みすみすアーク・デュランを逃がすわけにはいかない。時間が経てば、アーク・デュランは復活するかもしれない。倒すなら今しかない」
私の言葉に、『花』の魔法少女は首を振った。
「アーク・デュランの言葉を思い出してください。〝この世界に帰ってくる〟と言っていました。もしかすると、この先は別の世界に通じているのかもしれません」
「別の世界！　タージムのおとぎ話に出てくるやつでしょ？　本当に？」
『空』の魔法少女が驚きの声をあげた。
「分かりません。でも、このような転移魔法は見たことがありませんし……」
「だったら、なおさら危険だよ。この中に入ったら、もう戻ってこられないかもしれない」
そう言いながらも、彼女達は分かっているのだ。ここでアーク・デュランを逃がしてはいけないことを。今も円の維持に魔力を集中させているのがその証拠だ。
「……もう時間がない」
問答無用で円の中に飛び込んでもよかった。だが、これが彼女達、これまで共に戦ってきた仲間達との別れになるかもしれない。その想いが、私に言葉を紡がせる。
「今までありがとう。後は、私に任せて。アーク・デュランは、必ず私が倒す」
「アルフェリカ！」
「……行ってくる」
私は頭からゲートの中に飛び込んだ。ゲートの中を埋め尽くしている煌めく粒子が、私の体を、空間の奥へ奥へと進ませる。

「アルフェリカぁっ！」
背後からの声に振り返る。私が通過した円はかなり小さくなっており、仲間達の姿はほとんど見えない。
（これは確かに、もう戻ってこられないかもしれない……）
やがて円は完全に消滅した。すると、円の中に差し込まれていた４本のステッキが弾かれ、こちらの空間内に飛び込んでくる。
（みんなの、ステッキが……！）
あのステッキがなければ、魔法少女としての力を発揮することができない。数に限りのある貴重なものだ。
ここで４本も失うわけにはいかない。私は飛来するステッキに向かって手を伸ばした。
しかし――
「……ぁっ？」
ステッキは私を追い抜いて、先に空間の奥へと飛び去ってしまった。
（行き着く先は同じだといいけれど……）
空間の奥は光り輝いている。４本のステッキに続いて、私もその光に飲み込まれた。
（アーク・デュラン、待っていなさい。あなたは必ず、私が倒す……！）
視界が、白一色になった。

２

「うっ……！」
私は硬い物の上にお尻から落下した。
（なに、これは……）
周囲の地面が、固い灰色の物質で覆われている。
（すごく硬い……煉瓦とは違う……？）
気になる点は床だけではない。
私は周囲の光景を見て、驚きのため息を漏らした。
「ここは……？」
見たこともない光景だった。
足元の硬い物質が、延々と遠くまで続いている。左右には、同じく硬そうな物質で作られた建築物が隙間なく並んでいた。
頭上には曇り空が見える。ここが屋外なのは間違いないが、土や草樹といった自然のものが目に入ってこない。
（異世界に来たというのは、どうやら間違いないようね……）
元の世界では考えられない光景に、私はそう実感する。そしてここが、私がいた世界よりも、文明が進歩している世界だということも理解した。
（でも、この雰囲気……こっちの世界は荒廃しているの？）
周囲の物体は、その多くが破損しているようだった。近くにある手すりのようなものは

ひしゃげているし、建物の窓硝子には高確率でひびが入っている。
私は周囲の様子をもっと観察しようと立ちあがった、その時、重要な事実に気づく。
（大気の中に、魔力が、ない……!?）
元の世界ならば肌に感じるはずの魔力が、この場所では一切感じられなかった。これでは、体内に魔力を補充することができない。
「これは、まずい……」
（まさか、魔力がない世界があるなんて……）
とんでもないところに来てしまった。その実感が、私に重く圧し掛かる。
魔力の補充が叶わない今、私の体内に残った魔力だけで戦うしかない。
だが幸いなことに、先ほどの弱った状態のアーク・デュランであれば、十分に倒せる量の魔力が残っていた。
（魔力を補充できないのはアーク・デュラン達も同じ……）
周囲にアーク・デュランや四魔将の姿はない。別の場所に転移したのだろうか。一刻も早く彼らを発見し、勝負をつけなくてはならない。
（元の世界に帰還する方法は……アーク・デュランを倒してから考えよう）
そう思った時だった。
カシャ、という短い音が聞こえ、小さな閃光が私の目に届いた。
「……何!?」
（敵の攻撃……!?）
私はステッキを構えながら音のした方を向く。
そこには、２人の男性が立っていた。
「やっぱりあれ、魔法少女だよな」
「いや、分からない。コスプレじゃないのか？」
なとど、私の方を見ながら呟いている。
（こすぷれ……？）
私のこの格好が、こちらの世界では不自然に映るのだろうか。彼らが身に着けている衣服は、私がいた世界の衣服とは意匠が異なっている。
「スカート短くて、見えそうじゃないか？」
「身体のラインがはっきり分かる……なんかエロいな」
男達は私の身体をじろじろと眺めている。魔法少女の衣装がよほど珍しいらしい。
白と紫色で彩られた衣装。魔法のステッキに魔力を込めることで変身した姿だ。
上半身は肌着とローブ。下半身は丈の短いスカート。そして手袋とブーツが手足を覆っている。髪は輝く金色に変わっており、側頭部には髪飾りが付いている。
「ふとももの絶対領域がたまらないぜ」
「胸は大きすぎず小さすぎず、丁度いい美乳だな」
「なにより顔が可愛い」
「ああ、可愛い……」
カシャ。男が手にした箱状の物体を操作すると、再び閃光が私を包む。
どのような効果のあるアイテムかは分からないが、あまりいい気はしない。
「あなたたち、アーク・デュランがどこに行ったのか、知っていますか？」

私は彼らにそう問いかけた。その後、しまったと思った。異世界人である彼らにアーク・デュランと言っても、通じるわけがない。
しかし、彼らは顔を見合わせると、
「さあ、どこにいるのかなんて知らないぜ」
「名前はよく聞くけど、見たことはないよ。手下はよく暴れているから、動画で見たことあるけど」
と答えた。
「え……？」
（どういうこと……？　アーク・デュランがこの世界に来たのは、つい先ほどのはずなのに……）
状況が分からず、私は混乱した。手下がよく暴れている、という男達の言葉が正しいとするならば、だいぶ前からアーク・デュラン達がこの世界にいるということになってしまう。
（まさか、元の世界とこちらの世界では時間の流れが違う……？　アーク・デュランが転移魔法の中に消えて、私はすぐに追いかけたつもりだけど、かなり時間差が発生してしまった？）
この世界が荒廃したように映るのは、アーク・デュラン達がこちらの世界で悪事を働いた所為なのだ。
私達がアーク・デュランを逃がしてしまったことで、こちらの世界に被害が生じていることに、罪悪感を覚える。これ以上の被害が出る前に、アーク・デュランを倒さなくては。
「ねえねえ、君、本物の魔法少女なの？」
男の口から、魔法少女という単語が出るのは２度目だった。こちらの世界にも。魔法少女という概念はあるらしい。
「ええ、そうよ」
男の問いに、私は答える。すると男は、私が魔法少女だということが嬉しいのか、
「すげえ！　本物だってさ！」
はしゃぐようにその場で飛び上がった。
「ってことは、エビルズアークと戦っているんだよな？」
「ええ。エビルズアークと私は、ずっと戦ってきました。そして、ここで決着をつけます」
「あんな連中に、勝てるのかよ」
「勝てます……そのために私はここに――っ!?」
その時だった。嫌な気配を感じ、私は言葉を中断させる。
（この気配は……魔法生物！）
エビルズアークの四魔性の１人、Ｄｒ．バルドが生み出した、邪悪な魔法生物、通称『怪人』の気配だ。
（怪人が出てきたということは、エビルズアークが悪事を働こうとしている……？　急いで止めないと……！）
私は男達に背を向けて駆けだした。
怪人の気配は近い。到着までそう時間はかからないだろう。
「あー。魔法少女、行っちゃった」

「アーク・デュランを倒されるのは、困るんだけどなあ」
「情報、共有しとくか？」
「そうだな」
（……？）
背後から男達の声が聞こえたような気がしたが、今は立ち止まるわけにはいかない。
魔力で強化された身体能力を駆使して、私は硬い地面の上を、風のように走り抜けた。

３

悲鳴が聞こえた。
硬い地面が十字に交差しているところに、黒い人だかりができている。
全長２メルト程度の黒い怪人の群れ。その群れの中に、複数の女性がいる。その女性達は、服を着ていない。
（女の人を、犯している……!?）
黒い怪人に押さえつけられ、腰を打ち付けられ、涙を流している女性達。聞こえてくる声は、その女性達の悲痛な叫びだった。
（なんて、ことを……！）
私は怒りに顔を歪めた。と同時に、エビルズアークの狙いを理解した。
（ああやって、魔力を集めているのね）
大気中に魔力がないこの世界で、魔力を補充するため、エビルズアークは女性の体内にある魔力に目を付けたのだ。女性のみが体内に魔力を保有できるという特性は、この世界でも同じらしい。
女性の性的興奮が高まり、絶頂すると、魔力が体外に排出される。それを何らかの方法で収集しているとしたら、彼らのあの行動は理にかなっている。
だが、理にかなっていることと、その行為を許せるかどうかは、別の話だ。
（彼女達を、救出する！）
私は走る速度を保ちながら、ステッキを逆向きに持ち替えた。
（形状変化、『剣』！）
心の中で剣をイメージする。すると、ステッキの柄の部分の底から、魔力の刃が出現した。私は剣の形状になったステッキを構え、黒い怪人の群れに飛び込む。
「はぁぁぁぁっ！」
薄紫色の刃に両断された黒い怪人は、魔力の残滓となって消滅した。
（弱い……！）
所詮は量産型の怪人。耐久値は低い。
私に気づいた他の怪人たちが、一斉に襲いかかってくる。しかし、魔法少女に変身し、身体機能が強化されている私にとって、その動きはひどく緩慢に見えた。
「せえええぇぃっ！」
私は次々と剣を振るう。

剣が命中するたびに、黒い怪人が消滅していく。女性を襲っている怪人にも剣を突き立て、彼女達を解放した。

「逃げてください」

そう私が促すと、彼女達は目に涙を浮かべたまま、よろよろとその場を立ち去っていく。

（あと少し……いや、違う！　新手の気配!?）

後方に別の怪人の気配を感じ、私は振り返る。振り返った先には、黒い怪人の姿が無数にあった。

そしてその怪人達の中に、見知った顔を発見する。

「ルカンダ！　バルド！」

アーク・デュラン配下の四魔将が２人、並んで立っていた。

元の世界で私達の魔法攻撃を受け、ボロボロになっていたはずの２人だが、完全に回復している。やはり、彼らがこの世界に来てから、だいぶ時間が経ってしまったようだ。

「あらあら。懐かしい顔ねえ。私達を追ってこんなところまで来るなんて、御苦労なことだわ」

ルカンダの口調はこちらを馬鹿にしたようなものだった。私はそんな彼女を睨みつける。

漆黒の肌、背中に生えた翼、腰から伸びる尻尾、局部だけを覆った露出度の高い衣装。悪魔族特有の赤い瞳がきらりと光った。

「やれやれ。これは厄介な相手が現れたね」

その横でＤｒ．バルドがため息をついている。

漆黒の肌をした悪魔族の男性。白衣を身に纏い、片方の眼にモノクルを当てている。
（四魔将が２人と、多数の黒い怪人……魔力さえ十分にあれば、問題なく倒せるけれど）
この２人は、単純な戦闘力なら大したことはない。ルカンダは時間停止の魔法が厄介だが、私相手に魔法の発動条件を満たすことはできないだろう。バルドは知能だけが取り柄なので戦闘ではほとんど脅威にならない。
「別の世界まで来て、こんな悪事を……許せない！」
「ふふふ。あなた達がアーク・デュラン様を追い詰めるからいけないのよ。私達がこの世界に来たのはあなた達の所為だから、この世界に出た被害は、間接的にあなたたちの所為ってことになるわね」
「くっ……勝手なことを……！」
「ところで、お仲間はどうしたの？　まさかあなた１人で追ってきたわけじゃないでしょう？」
「……」
私１人で追いかけるのがやっとの状況だった。しかし、正直に答える必要はない。
「そういえば、この世界に現れた２人の魔法少女は、あなたのお仲間の魔法少女と、衣装が似ていたわね」
「……？　どういうこと？」
「さあ。あなたの方が知っているかと思ったけれど、そうでもないみたいね。もしかして、この世界に来たばかりなのかしら」
「……」
あまり情報を与えるのは望ましくない。私がこの世界に辿り着くまで、彼らが何をしていたかについては、彼らを蹴散らしてから聞きだすとしよう。
私は剣を構える。私の殺気を感じ取ったのか、ルカンダは口を閉ざした。代わりにバルドが口を開く。
「やれやれ。気が進まないけど、彼女の相手をバイオ兵に任せるわけにはいかない。幸い彼女は１人だ。一斉にかかれば倒せるかもしれない」
「誰が私を倒すですって？」
「僕の自信作だよ。３人とも、出番だ」
「……！」
私を取り囲むように、３体の怪人が空から降ってきた。周囲の建造物の上から飛び降りてきたのだろう。
この怪人達は、量産型の黒い怪人とは見た目が異なっていた。Ｄｒ．バルドが自信作と言っていたことから、特別な怪人だと思われる。
１体目は、大柄で灰色の怪人だ。特徴は、太い腕が８本あること。手数の多い、パワー型の怪人といったところか。
２体目は、粘着性がありそうな液体を全身に纏っている青い怪人。あの液体に触れると身動きができなくなってしまうだろう。注意が必要だ。
そして３体目は、特に特徴のなさそうな白い怪人。体躯も黒い怪人とさほど変わらないように見える。能力が不明なだけに、こちらも注意を払う必要がある。
（来る……！）

「オオオオオ！」
８本腕の怪人が、腕を大きく左右に広げながら、こちらへと突っ込んでくる。至近距離で繰り出された拳を、私は横に跳んで回避する。
（速度は大したことない。でも、あの拳を受けたら、障壁を壊されるかもしれない）
その時、背後から粘液怪人が、半透明の液体をまき散らした。頭上から降り注ぐ無数の液体に触れないよう、私は着弾地点から抜け出す。
（粘液は気を付けていれば大丈夫そう。後は……）
私が白い怪人に視線を送ると、その姿は、すうっと背景に溶け込むようにして、消え去ってしまった。
「……！」
（透明になる怪人か）
視界に映らないのは厄介だ。しかも、透明になると同時に、怪人特有の嫌な気配も消失してしまい、気配で察知することもできない。
だが、能力が分かってしまえば対処の仕様もある。
（形状変化、『槌』！）
私はステッキに魔力を込める。すると、薄紫の刃が形状を変え、先端が円筒状の槌の形になった。
「はぁぁあぁぁっ!!」
私はその槌を、怪人、ではなく、硬い地面へと叩きつける。
ゴッ。
煉瓦よりも硬い感触。しかし、私の槌に砕けないものなどない。
『星』の魔法少女である私は、物質の重さを操作する魔法や、物質を引き寄せたり、引き離したりする魔法に長けている。私の槌は、魔法の効果により、その見た目からは想像もつかないほどの重さになっていた。
槌を受けた地面は粉々に砕け、無数の破片へと変わる。
「行けっ！」
私は宙を舞う破片に、引き離す力を加えた。私を中心として、破片が周囲へと飛び散る。破片はつぶてとなって、怪人達に襲いかかった。
「オォォォォ……！」
複数の破片に打たれた粘液怪人が倒れる。そして、姿を消していた透明怪人も、襲い来る破片をその身に受けたことで透明化が解除され、粘液怪人と同じく地面に倒れた。
しかし、８本腕の怪人には、破片攻撃は効果がないようだった。破片をその身に受けながらも、私に殴りかかろうとこちらへ突っ込んでくる。
（頑丈な奴……それなら！）
私は槌の先端にさらに魔力を込め、強力な反発の魔法を展開する。
「オォォォォッ！」
振り下ろされる複数の腕をかいくぐり、怪人の胴体に槌を叩き込んだ。
強烈な反発力を受けた８本腕の怪人は、突っ込んできた時の倍以上の速度で逆方向に吹き飛んでいく。
怪人は地面を転がり、ルカンダ達の目の前で止まった。

「自慢の怪人もこの程度？」
「やれやれ……相変わらず、恐ろしい強さだね」
粘液怪人と透明怪人は起き上がり、Ｄｒ．バルドの傍まで移動する。あれで体勢を立て直しているつもりだろうか。
（面倒ね……一気に決める）
敵との距離、１０メルト。十分に射程内だ。
私は武器として結晶化させた魔力を解除し、槌状態から、ただのステッキの状態に戻すと、それを両手で構える。
（この魔法は、魔力の消費量が多いから、あまり使いたくはなかったけど……）
今なら四魔将２人と特殊な怪人３体、そして無数の黒い怪人を一度に倒すことができる。使い時としては問題ないはずだ。
「星の力よ！」
私は魔力を解き放った。すると、ルカンダ達の周囲に、魔法陣が展開される。
「これはっ……しまっ――」
魔法陣の中にいる物体は、星に引き寄せられる力が何十倍にもなる。ルカンダ、Ｄｒ．バルド、そして無数の怪人達が、地面に張り付くように倒れていく。
「まいったね、これは……」
「くっ、おのれっ……！」
ルカンダ達が苦しそうに顔を歪める。このまま星に引き寄せ続けることで、彼らを崩壊させることができるだろう。
耐久力の低い黒い怪人達が、次々と光へと変わっていく。残るは四魔将２人と特殊な怪人３体のみ。彼らが消滅するまで、さほど時間はかからない。
そう思った、その時、
ドゴォ！
突如、ルカンダ達の背後の地面に穴が開いた。
「……!?」
穴からは、液体が染み出し、人の形を作る。
私はその液体を知っていた。体をスライムで構成している魔法生物。四魔将の１人、グリーヴァだ。
「久しいな、魔法少女アルフェリカ」
「グリーヴァ……！」
「おっと、今日は戦うのはよそう。私とて、この魔法陣の中では長く形状を保っていられない。お楽しみは、またの機会にとっておくぞ」
「……！　待ちなさい！」
次の瞬間、グリーヴァの体が膨れあがり、倒れているルカンダ達を包むと、空いた背後の穴の中に引きずり込んだ。
「では、さらばだ」
最後に残ったグリーヴァの頭部も穴の中に消える。
その場には、私だけが残された。
「くっ……」

（また、逃げられた）
私は悔しさで表情を歪めながら、魔法を解除した。
結局倒せたのは黒い量産型の怪人だけだ。四魔将にも、特殊な強化怪人にも、結局止めを刺せていない。
（魔力の消費が大きい。これは、まずいかも……）
今回の戦闘で、かなり魔力を消費してしまった。この先、限られた魔力だけで敵を全て倒すのは、非常に難しくなってくる。
（体力的な疲労も大きい）
思い返せば、今日はずっと戦ってばかりだった。エビルズアークの居城に乗り込み、四魔将とアーク・デュランを追い詰め、そして異世界での戦闘……強い疲労感に襲われている。
見知らぬ世界で孤独という状況が、とても心細く感じられる。仲間達がいれば、どんな場所でもやっていけると思えるのに、今私の隣には誰もいない。
（弱気になってはいけない。私を信じている皆のためにも、やり遂げなければならない）
「まずは、どこかで体力を回復させないと……」
私は体を休めることができる場所を探して、歩き始めた。

4

歩き始めてしばらくした頃、不意に声をかけられた。
「ねえ、３人目の魔法少女って、君のこと？」
「……？」
私が振り返ると、そこには、１人の男性が立っていた。
私は答えず、男性に訝しげな視線を送る。
「あっ、やっぱり、画像と同じだ」
その男性は、箱状の物体と私を見比べ、何かに納得したように頷いている。その箱状のアイテムは何なのだろうか？　先ほどいた男性も持っていたので、この世界では広く普及している物なのかもしれない。
「中町の交差点で魔法少女を発見、っと、拡散完了」
男は箱状の物体を指で操作していたが、それが終わったのか、私の方に向き直る。
「少し待っていてね、魔法少女さん。じきにみんなが来るから」
「……？　みんなというのは？」
「すぐに分かるさ。っと、もう来た。早いな」
男の視線を追うと、周囲から、ぞろぞろと男性達が集まってくるのが見える。ずらりと、総勢数十人が、私を遠巻きに取り囲んだ。
男達の顔は、ニヤニヤと笑っている。
（よくない雰囲気……立ち去りましょう）
私は周囲を見て、比較的男達のいない方向へ歩き出す。この包囲を抜けたら、彼らと距離をとろう。そう思った矢先、複数の男が私の進路に立ち塞がった。

「何のつもりですか？　どいてください」
男達は答えない。にやにやした顔のまま、私の進路を塞ぎ続けている。
（この男達は何が目的なの……？）
彼らに付き合う義理はない。ここは星との反発力を利用して、周囲の建造物の上に移動し、彼らを引き離そう。
そう思い、足に魔力を込めようとした、その時、
「きゃぅ!?」
背後から接近した別の男が、おもむろに私に抱きついたのだ。
「ちょっと、何をするのですか……離しなさい！」
私は力を込めて、男の腕を引き剥がす。魔力で強化された私の力なら、普通の人間を引き剥がすくらい、簡単なことだ。
しかし、その男を引き剥がした直後、周囲から複数の男達が私に群がってきた。
「……！」
私の腕を、脚を、体を掴み、自由を奪おうとする。
「ステッキを奪え！」
「っ……!?」
（この人たちは、魔法少女の力の源がステッキだと、知っている……！）
魔力の増幅器であるステッキを手放せば、強力な魔法が使えなくなり、身体能力も激減してしまう。しかしなぜ、この世界の住民がそれを知っているのか。
（やはり、この世界にも魔法少女が……？）
私に声をかけた男性は、私に３人目の魔法少女かと尋ねた。これはつまり、私より前に、この世界に２人の魔法少女がいたことを意味している。ルカンダも同じようなことを言っていたので、間違いないだろう。
異世界の魔法少女、彼女達は今どこに――
「くっ、ステッキに触れるな……！」
男達の手が私のステッキを掴んだ。これを奪われるわけにはいかない。
「はぁぁぁっ！」
私は自分の周囲に引き離す力を展開させた。それにより、私に触れていた男や、ステッキを握っていた男が、弾かれて地面に倒れる。
（こんなところで魔力を消費してしまうなんて……）
「……あなたたち、どうして私の邪魔をするのですか？」
その問いに、男の１人が答える。
「俺達はエビルズアークに協力しているからな。エビルズアークの敵である魔法少女は、俺達の敵でもあるってことだよ」
「……！　あなたたちは、アーク・デュランに味方するって言うの!?」
私は驚愕した。
街を荒廃させられ、女性を襲われ、それでもこの男達は、アーク・デュランに味方すると言っているのだ。
私の世界では、〝魔王〟アーク・デュランを倒すため、住民たちが一丸となって、私達魔法少女をサポートしてくれた。しかしこの世界の住民は、あろうことかアーク・デュラ

ンの手助けをしている。
（どうして悪に協力なんてするの……？）
分からない。なぜ彼らがアーク・デュランの支配を受け入れようとしているのか、まったく理解できない。
「そういうわけで、魔法少女さん、君からステッキを奪って、エビルズアークに引き渡させてもらう」
「引き渡す前に、俺達で楽しむけどな」
「……楽しむ？」
「そうさ。そのエロい衣装を引き裂いて、いやらしい穴に俺達のモノを突っ込んで、ヒイヒイ言わせてやる」
「な……！」
下衆な妄想に、私は言葉を失った。男達のいやらしい目つきは、私を性欲処理の道具にしようと目論むものだったのだ。
その思考は、もはや悪魔にも劣っている。
「……」
説得を試みるべきだろうか。アーク・デュランの非道さを教えれば、彼らも考えを改めるかもしれない。
だが、それには時間がかかるだろうし、全員が納得するとも限らない。
（ここはやはり、逃げたほうがよさそうね）
私は脚に魔力を込め、上空へと跳び上がった。うまく姿勢を保ちながら、大きな建造物の屋上へと着地する。
地面に置き去りにされた男達は、呆然とした様子で頭上を見上げていた。ここまで引き離せば、もう追いかけてこないだろう。
（さて、どこか身を隠せる場所を探さないと）
周囲を探ると、建物の内部に入るための扉を発見した。
（これ、どうやって開けるの？）
扉には持ち手のようなものがあったが、押しても引いても扉は開かない。焦る私が強く力を籠めると。
バギン！
「ぁ……」
扉ごと外れた。
「……」
私は外れた扉をそっと壁に立てかけると、内部に侵入する。
（暗いところね）
階段を下りた先は薄暗かった。正面にまっすぐな通路が伸びており、左右に扉が並んでいる。
（これは、どこへ行けば……）
まっすぐ進むべきか、左右の扉に入るべきか、選択肢が多く、私は逡巡する。ここは左右の扉を無視してまっすぐ進むことにする。
しかし、しばらく進むと、通路は行き止まりになっていた。突き当たりには、なにやら

扉のようなものが２つあるが、取っ手がなく、開け方が分からない。
「……」
その扉を壊してみようか。そう考えた時だった。
チーン、という鈴のような音が響いたかと思うと、目の前の扉が左右に開いた。
「……！」
その扉の先は、狭い部屋になっていた。そしてその中には、ぎっしりと男達が詰まっている。
（どうしてそんな狭いところに……？）
待ち伏せされていたとは考えにくい。男達の入った小部屋は、何らかの動力で、下から押し上げられたと考えるべきだろう。
「くっ……！　こんなところまで、追いかけてくるなんて……！」
男達はぞろぞろと小部屋から出てくる。
その数、約１０人。
私はステッキを構えた。これくらいの人数なら、魔力を消費せずとも、格闘だけで無力化できる。
跳びかかってくる男達を、次々と殴り倒していく。アーク・デュランに味方しているとは言っても、異世界の住民が相手なので、一応殺さない程度には手加減しておいた。
残りはあと数人となった時、再び鈴の音が鳴り響く。
「……！」
先ほどとは違う扉が開き、中から新たに１０人の男が現れる。
（きりがない）
男達は私を取り囲み、じりじりと範囲を狭めてくる。魔法を使えば一網打尽にできるが、魔力を消費してしまう上に、彼らを殺してしまう危険性もあった。
そんな時、さらに鈴の音が鳴り、最初に開いた扉からさらに男が出現する。
「くっ……！」
狭い空間が、男達で埋め尽くされた。男達はタイミングを合わせ、私に掴みかかってくる。
「近寄るなっ……！　触る、なっ……！」
私は伸ばされる手を次々と振り払った。
１人の男性が、私のローブを掴んだため、私は咄嗟に蹴りを放った。蹴りの衝撃で吹き飛んだ男は、周囲の男達を巻き込みながら床に倒れる。
しかし次の瞬間、私の股の間に差し込まれた手が、勢いよく振りあげられ、私のスカートをめくりあげた。
「うひょう！　パンツ、黒かよ！」
「魔法少女、エロすぎ！」
私の下着を見た男達が騒いだ。
（下着が見えたから、何よ……！）
私は男達に苛立ちを募らせていく。殺傷力の高い魔法でまとめて吹き飛ばしたい衝動に駆られた。
（形状変化、『槌』！）

しかし、魔力の消費は抑えなければならない。私は最小限の魔力でステッキを槌形態に変化させると、その先端を床に叩きつけた。

ドゴォ、建物が揺れる。槌の攻撃により、足元に人が通れるほどの穴ができた。私は迷わずその穴に跳び込む。

着地。そこは上の階と同じ構造になっていた。

「逃げたぞ！」

「下だ！　追いかけろ！」

頭上から男達の声が聞こえる。私は槌を手にしたまま、左右に扉が並んでいる通路へと進んだ。

「はぁぁぁぁっ！」

槌を振るい、手近にあった扉に叩きつける。扉はぐしゃりとひしゃげ、残骸が内部に転がった。

（窓がある）

正面には、四角いガラス張りの窓があった。私はその窓を突き破り、建物の外へと跳び出す。

私の体は重に引かれて落下を始めた。地面が眼前に迫ると、私は自身の体に、地面と反発するように力を加え、落下する速度を減少させた。ふわりと、綿毛が落ちるような速度で着地する。

（誰もいない）

身を隠す好機である。

私は建物と建物の間にある細い通路を見つけ、そこに身を隠そうと駆けだした――その時、

ガッ！

強い衝撃が私の体を揺さぶった。

「……!?」

胴体に何者かが突進してきたような感覚があった。だが、私の目には何も映らない。

（まさか、こいつは……！）

目に見えない。となると、思い浮かぶのは、先ほどの透明になる怪人だ。その怪人が私に忍び寄り、体当たりを仕掛けてきたのだ。

体当たりによる衝撃のほとんどは、私の魔法障壁が防いでくれている。しかし透明怪人は、私の胴体に抱きつき、体重をかけ、私を押し倒そうとしてきた。

ぐらりと私の体勢が崩れ、視界が斜めになる。

「くっ……！」

私は反発の魔法を透明怪人に放った。透明怪人は私から離れ、どこか地面に落下する。私は地面に手をついて跳び上がり、転倒を回避した。透明怪人が転がった方向を向きながら地面に着地する。

その着地の瞬間が狙われた。

「……！」

べちゃり、と粘性のある液体が私の両足に絡みついた。その液体は瞬時に固まり、私と地面とを縫い止めてしまう。

（粘液怪人……！　どこから？）
その怪人が身を潜めていたのは、私の背後、先ほど私が身を隠そうとした路地の中だった。
（この近距離で、気配に気づかないなんて……不覚っ！）
正確には、気配を感じてはいたのだろう。しかし、先ほどの戦闘以降、周囲のあちこちから怪人の気配を感じていたため、その１つ１つに注意を払うことができなかった。男達から逃れることに集中していたことも大きい。
「これ、剥がれ、ない……！」
私は力を籠めて足を動かしたが、がっちりと固まった液体から足を引き剥がすことができなかった。
（仕方ない、地面を破壊して、引き剥がす）
そう思い、槌を振りかぶった。その直後、
ドォォン、という振動と共に、８本腕の怪人が、私の真正面に着地した。
「……！」
「オォォォォォッ！」
怪人の太い腕が、槌を振り上げていた私の右腕を掴む。これでは槌を振り下ろすことができない。
さらに、８本腕の怪人は、別の腕で私の左腕をも掴んだ。
「くぅぅぅっ!?」
両足を地面に縫い付けられ、両腕を掴まれた私は、四肢の自由を奪われる。
（いけない）
私は目の前の怪人を吹き飛ばそうと、反発の魔法をイメージした。しかし、それよりも早く、怪人に残った６本の腕が、私の体を殴りつける。
ゴッ！　繰り出された拳が私の魔法障壁を貫通し、腹部に突き刺さった。
「ぐ、がぁっ……!?」
６本の腕が次々と私を殴る。ドドドドド、と、すさまじい衝撃が私の体を揺さぶった。１発１発が激痛を生み、私の体を軋ませる。
「うぎっ、ごっ、ぉ、がぁあぁぁぁっ！」
四肢を固定されているため、後ろに倒れることもできず、私は連打を身に受け続けた。
それは何十発目だろうか。拳が深く腹部にめり込むと、私の全身から力が抜ける。
カラン、と、私の手から滑り落ちたステッキが、地面に落下した。結晶化していた槌の部分が音もなく消滅する。
（しまった……！）
ステッキを手放す。それは、魔法少女としての力を発揮できなくなることを意味する。
周りに仲間がいれば、このような状況でも助けを期待することができた。しかし、ここには誰も味方はいない。落ちたステッキを回収し、私に渡してくれる存在など、どこにもいない。
「ぐ……ぁぁ……」
私は８本腕の怪人が空いた手でステッキを拾い上げるところを見ながら、激痛により意識を失った。

５

頭がずきずきする。
目を覚ました時、私は広い建物の中にいた。セントベルの大聖堂くらいの空間だ。周囲を囲む金属の壁はボロボロに朽ちている。使われなくなって久しい倉庫といったところか。
時刻は既に夜になっているのか、天井から降り注ぐ灯りのみが室内を照らしていた。
（体が、動かない……）
私は８本腕の怪人に両手と両足を持たれ、拘束されていた。
ステッキは手元にない。魔法も使えず、力が出ないこの状況では、怪人の腕から逃れることはできそうにない。
「みんな、魔法少女が目を覚ましたわよ」
すぐ横に、ルカンダが立っていた。そして、彼女の言葉を合図に、大きな男達の声が歓声となって室内を揺るがす。
「……！」
室内には、男がずらりと並んでいた。その数、５０人以上はいる。私を追いまわした連中も含まれているのだろうか。
８本腕の怪人は、私の体を男達に見せつけるように、高く掲げた。それにより、男達の歓声がさらに大きくなる。
（まるで、磔にされているみたい）
周囲をよく見ると、８本腕の怪人の後ろには、粘液怪人や、透明化していない透明怪人も控えている。Ｄｒ．バルドやグリーヴァの姿はない。
「ねえアルフェリカ。今の気分はどう？」
ルカンダが私の顔を見上げる。にやついた、勝利者特有の視線を向けられ、私は屈辱に顔を歪める。
私からの返事を待たずに、ルカンダはさらに言葉を続けた。
「あなたには、散々いたぶられたわよねえ。これまでのお返しができると思うと、ゾクゾクするわ」
「くっ……」
「今から何をされるのか、分かる？」
「……」
拷問か、処刑か。どちらにせよ私を苦しめる類のものだろう。
「殺すなら、殺せばいい……」
「あら？　アルフェリカはもしかして、自分が痛めつけられると思っているの？」
「……？」
「あなたはこれから、私達に魔力を提供するの。気持ちよくなって、ここにいる皆に恥ずかしい姿を見られながら、絶頂して魔力を差し出すのよ」
（そういう、ことか）
大気中に魔力のないこの世界では、私の体内に残る魔力が貴重なのだ。黒い怪人が女性

を襲って魔力を集めようとしていたように、私から魔力を奪おうとしている。
（甘く、見られたものね）
魔力を奪うためには私を絶頂させる必要がある。だが、敵の責めなどで絶頂など、するはずがない。
（どんな責めにも、必ず耐えてみせる）
私は固く決意するとともに、正面の男達を睨みつける。
（お前達の思い通りには、ならない！）
「あら？　『私は絶対に感じない』って顔をしているわね」
「……」
「ふふふ。楽しくなってきたわ。そんなあなたが、絶頂を繰り返し、泣いて許しを請うところを、見たくてたまらない」
「そんなことには、ならない」
「どうかしら？　私はね、こんな魔法も使えるようになったの」
ルカンダの指が、私の首筋に当てられる。
「……？　何を……」
「この世界で効率よく魔力を集めるために習得した魔法。対象の性的な感度を１０倍にすることができるのよ。いくらあなたでも、ステッキがない状態では、抵抗できないでしょ？」
「っ……！」
私はルカンダの指から逃れようと身をよじったが、四肢を拘束された状態では無駄なことだった。ぴたりと首筋に当てられた指から、何らかの魔力が流れ込んでくる。
やがて、ルカンダの指が首から離れた。感度を上昇させるという魔法が完成してしまったのだろうか。
その効果は、すぐに現れた。
「うっ……」
（身体が、熱い……！）
体温が上昇している。風邪を引いたかのように、吐息に熱が籠っていた。身体から力が抜けていく。
身体の内側だけでなく、外側にも変化があった。全身の肌が、敏感になっている。僅かな風が肌を撫でただけで、びくん、と、過剰に反応してしまう。
「く、ぅぅ……こんな、っ……はぁ、はぁ……」
「あら？　どうしたの？　まだ何もしていないのに、もう感じちゃったの？」
「……そんなわけ、ない、でしょう」
「そうよね。もう感じているんだとしたら、この先の楽しみがないもの。あなたがどれくらいの間、感じずに耐えることができるのか、見せてもらうわよ」
「……」
先ほどまでの余裕は、私にはなかった。この熱く、敏感になった身体で、どこまで耐えられるのか、不安になってくる。
（いけない。弱気になるな。私はみんなの期待を背負っている……こんなことで、屈するわけには――）
「それじゃあ、アルフェリカを責めてあげなさい！」

「オォオォォォ！」
ルカンダの合図で、８本腕の怪人が、背後から私の両胸を鷲掴みにした。
「んっ……く、ぅ、ぁ……っ……」
怪人の太い指が動きまわり、魔法少女の衣装越しに胸を揉みしだく。
びりびりとした、甘い感覚が全身を奔った。
（これは、っ……胸を揉まれただけで、こんな、感覚っ……！）
体内に巻き起こったその感覚を、私は知らない。幼いころから訓練を受け、魔法少女になってからは戦いの連続で、誰かに胸を揉まれるような経験は、これが初めてだった。
身体が、さらに熱くなっていく。大勢の男の前で、怪人に胸を揉まれているという屈辱的な状況なのに、私の身体は、胸を揉まれることを心地よく感じてしまっていた。
（これは、いけない……抵抗しないと、流される……！）
「んぁ、く……ぅっ、くぅ……ぁっ、ぁ……っ、ぁぁ……」
刺激に対して身体が反応し、小さな声が漏れる。
私は目を閉じて、湧き上がる感覚を抑え込もうとした。しかし、乳房の上を動く怪人の指の動きがどんどん激しくなり、受ける刺激は増すばかりだった。
ビリビリビリィ！
「ぁ、っ……！」
突然、怪人の腕が、衣装の胸元を左右に引き裂いた。素肌や黒い胸袋が露出する。
私を見る男達の視線が、胸元に集中した。
「おぉぉぉっ！　ブラジャー、黒だ！」
「黒いブラとか、エロすぎだろ！」
「確かパンツも黒だったぞ」
「この魔法少女、淫乱娘だぜ」
男達は矢継ぎ早に言葉を放つ。意味の分からない単語が多かったが、私の肌と胸袋を見て、性的興奮を高めていることは伝わってきた。
「くっ……この、見るな――ん、ひぅぁあぁぁ！」
怪人の手が、胸袋の内側に入り込んできた。指が直接乳房に触れ、くにくにと弄ぶ。柔らかな乳房が怪人の指によって様々な形に変えられていく。
「っ、ぁ……激しい、ん、く、っ……ぁっ、ぁっ……」
「どうしたのかしら？　息が荒いわよ？　まさか、胸を揉まれたくらいで、感じているの？」
「く……こんなことで、感じるわけ、ないっ……んっ、ぁ、ぁぁ……」
「そう。それはよかったわ。こんなに簡単に感じられたんじゃ、つまらないもの」
「くぅぅ……」
ルカンダは相変わらずニヤイヤした視線で私を眺めている。感度を１０倍にする魔法のせいで、私が敏感になっていることを知っての上で、そのようなことを言っているのだ。
現に、少しでも気を抜いたら、怪人による胸への責めで生じているこの感覚を、快感だと認識してしまいそうになっている。
（私は、敵の手で感じるなんてこと、絶対に、ない……！）
しかし次の瞬間、怪人の指で両方の乳首をいっぺんに抓られ、私は悲鳴を上げた。

「くひゅぅぅぅぅんっ!!」
（な、何今の……刺激が強すぎて、声が……）
胸の奥から、凝縮された快感が溢れ出した。
そう、快感だ。もう誤魔化しようがない。あろうことか、怪人の指で乳首を抓られて、私は気持ちよくなってしまったのだ。
「ぁぅ、そこは……ぁ、っ、くぁあぁぁぁぁっ……そこ、こりこりしては……んっ、く、ぁ、ぁああぁっ……！」
「何？　乳首が気持ちいの？　感じちゃったの？」
「ちっ、違う……私は、感じてなど……ぁぅぅぅっ……」
それが嘘だということは、私自身が一番よく分かっていた。心地よい感覚は胸全体に及んでおり、怪人の指が動くたびに、甘い声が漏れてしまう。
「それじゃあそろそろ、下半身も弄ってあげて」
「……！」
怪人の腕は８本。私の手足を拘束する４本と、胸を揉む２本以外に、まだ２本余っている。
そのうちの１本が、後ろからスカートの中に差し込まれ、股間を掴んだ。
「んんっ！　んあぁあぁぁぁぁっ!?」
怪人の指が下着越しに私の秘所を擦る。股間の割れ目に沿って指を這わされ、湧き上がった快感に私は身をのけ反らせた。
「ぁっ、そこは、いけない……っ、ぅぁ、ぁくぅぅ……んっ、ぎっ、ぁ、ぁあぁぁ……！」
怪人の指が激しく秘所を撫でまわす。敏感な部分への激しい刺激に、下腹部がきゅぅぅんと熱くなる。
（これは、何か、溢れてくる……私の中から、何か、出てくるぅっ……！）
股間の割れ目から、熱い液体が溢れてくる感覚があった。その液体は瞬く間に下着に染み込んでいく。怪人が秘所を擦る動きに合わせて、くちゅくちゅと水音が響き始めた。
「いやらしい音が聞こえるわね。愛液を滴らせて、感じているんじゃない」
「愛、液……？」
「あら、知らないの？　女の子が感じた時に分泌されるのよ。あなたのそのいやらしい穴は、おちんちんを欲しがっているってわけ」
「な……そんなもの、欲しくなんて、っ、ぁ、ぁぁ……そんなに激しく、擦る、なぁ……んっ、ぁ、っ、ぅ、ぁあぁぁ……！」
「そんなだらしない顔で喘ぎながら言われても、説得力がないわねえ。さあ、もっと激しく責めてあげなさい」
「いやっ、もうやめ、っ、ぁぅぅぅぅっ！」
グチュグチュグチュグチュ……！
指の動きが激しくなり、水音が大きくなる、それに比例にして、私への刺激が増していった。
（こんな怪人に、大事なところを触られて、気持ちよく、なるなんて……！）
「くぅぅ、んんっ、んぅぅ……ぁぅ、ひぃぅっ、っ、くぅぅぅ……！」
倒さなければならない敵の前で、私は淫らな喘ぎ声をあげている。

声を、快感を抑えなければならない。だが、私の意思とは無関係に、声は昂り、快感が増していく。
足を拘束する怪人の手が、左右に広がっていく。私は膝を曲げさせられ、目の前の男達に向かって大きく股を開いたポーズをとらされる。
「く……や、やめろぉ……！」
男達からは、私の下着が丸見えになっていた。
「おおお！　本当にパンティーも黒だぜ！」
「なんか、すっごく濡れてないか？」
「ああ、下着が愛液でぐっしょりだ」
「やっぱり淫乱なんだよ！　うひょぉぉ！」
私は恥ずかしさで顔が熱くなるのを感じた。男達の視線が私のいやらしい部分を凝視している。それを意識するだけで、私の敏感な肌が刺激を受けているように感じられた。
「見るなっ……ぁ、ぅっ、ぁぁぁ……！　それ、脱がすな、っ……！」
怪人が私の下着を脱がしていく。するりと、下着がふとももを滑り、股間が露出する。
男達からさらなる歓声が上がった。
「丸見えだ！」
「やっぱり濡れてやがる！」
「おまんこ、ヒクヒクしてるぞ！」
（くぅぅ……見るな、見るなぁ……！）
そして、剥き出しになった秘所に、再び怪人の指が這う。
「ぅぁぁ、ぁぐ、んっ、んぁぁぁ……！　いやっ、直接、んっ、ん、ぁ、ぅ……ぅぁぁぁ……」
溢れる快感に、身体の昂りを抑えられない。気持ちいいという感覚が、どんどん身体の中に溜まっていく。自分の身体なのに、自分の意思で制御できない。
「んっ、ぁ、ひぅ、く、ん……ぁ、ぁ……っ、くひぃぃぃぃぃんっ!?」
突如、新たな刺激が私を襲い、私は身体を震わせた。
８本腕の怪人が、秘所を擦る手とは別の手で、股間の割れ目の先端部分にある突起に触れたのだ。
「ふふふ。クリちゃん、感じちゃった？」
「……くり？」
「あなた、自分の身体のこと、ちゃんと知った方がいいわよ。クリトリス。敏感な部分だから、触られて感じないようにしてね。それとも、もう手遅れかしら？」
「そんなこと、な――くひゅんっ！　んっ、ぁぅ、そこ、いや、いや……んぁぁぁぁっ、く、そこ擦られたら、んくっ、ぁ、んぎゅぅぅぅぅっ……！」
クリトリスという部位を執拗に責められ、私は大声を上げた。怪人の指が突起を弾くたびに、鋭く刺すような刺激が身体を貫き、腰がびくびくと跳ねる。
（これ、刺激、強すぎる……身体中が、気持ちよくなってしまう……！）
胸を揉まれ、乳首を抓られ、秘所をなぞられ、クリトリスを弾かれ……私の性感は高まり続けていた。
（この感覚、私、知らない……何かが、昇ってくる……！）

絶頂。
その言葉が私の頭に浮かんだ。このまま快感を与えられ続けたら、そう遠くなく、私は絶頂に辿り着いてしまう。そんな確信めいた予感が私の中にあった。
（絶頂したら、魔力を失ってしまう……！）
それは、絶対に避けなければならないことだった。しかし、それを防ぐ術がないことも、本能で理解していた。
怪人の責めにより、身体中が快感で埋め尽くされていく。
（いけない……来る、来てしまうっ……！）
そして、あわや絶頂に辿り着きそうな、そのタイミングで、
「お待ちなさい」
ルカンダの声が、怪人の責めを中断させる。
「……ぁ、ぅっ、ぁぁ……？」
責めを中断され、私は情けない声を漏らした。絶頂の寸前で刺激を失ったことで、身体中に切ない疼きが充満する。
（もう少しで、絶頂できたのに……っ!?　私、気持ちよくなりたがっていたの？　絶頂したら、魔力を失ってしまう。それだけは、避けなければならないことなのに……！）
快感に流されてはいけない。そう頭では分かっていても、敏感にされた身体は無意識に快感を求めてしまっている。
「今絶頂させてしまったら、魔力を集められないじゃない。絶頂させるのは、挿入した状態でよ」
「オォォォォ！」
怪人が返事をする。すると、拘束された私の身体が、そのままの姿勢で下方向に移動を始めた。
（……？　挿入って、まさか……！）
ぴたり。何かが股間に触れる感触があった。恐る恐る下を見ると、私の秘所、膣の入り口に、怪人の股間から生えた灰色の突起物が当てられていた。
「な……嘘っ、これ……！」
「さあ、アルフェリカ、ちゃんと見ておきなさい。これが今から、あなたの中に挿入されるんだから」
「ひっ、そんな太いの、入るわけ、ないじゃない……！」
「あら？　もしかして、アルフェリカ、経験がないの？　処女なの？」
「くっ……それが、何だって、言うのよ……！」
私がそう言うと、周囲の男達からどよめきが起こった。
「まじかよ。処女なのか！」
「あんなにエロい身体なのに、経験ないのかよ」
「ってことは、これから処女貫通ショーが見られるのか！」
「いいぞ！　処女膜ぶちやぶれ！」
男達の煽りが、私の焦燥感を募らせる。
膣内に、ペニスが挿入される。それは私にとって初めての経験だ。
戦いに明け暮れてきた私でも、初体験は特別なものにしたいという想いがある。大切な

人と、身体を重ねる瞬間。それを想像したことがないほど、私は幼くない。
しかし、特別は特別でも、このような形で初めてを経験するのは、絶対に嫌だった。倒すべき敵の前で、大勢の下衆な男達に視線を向けられながら、怪人の手によって奪われる。そんなことを、許してはならない。
「いやっ！　放せっ！　くぅぅっ、放せぇぇっ!!」
私は力の限りもがいた。しかし、屈強な怪人の拘束はびくともしない。
「くっ、ぅぅ……ステッキさえあれば、こんな奴なんかにっ……！」
ステッキを手にしていれば、身体能力が強化され、この腕を振りほどくことができる。もしくは魔法を使って、この怪人を吹き飛ばすことだってできる。
しかし、今の状況では、どちらも不可能だ。
「お探しのものはこれ？」
ルカンダが手にしているのは、私のステッキ。手さえ自由なら掴むことができる距離にあるのに、今の私にはそれも叶わない。
「私のステッキ……！　返せっ！」
「嫌よ。せっかく奪ったのに、返すわけないでしょ。あなたは今から、その怪人に犯されるのよ。諦めなさい」
「いや、いやぁ……！　ぅっ、ぁ、ぁぁぁ……!?　これ以上、下げたら、入ってしまう……！　いやぁぁぁっ！」
怪人はさらに私の身体を引き下げていく。怪人のペニスの先端が、私の淫唇の間に入り込んでいく。
「やめっ、やめろぉ……！」
「あなたのあそこは、挿れてほしいみたいよ。ヒクヒクして、おちんちんを受け入たくてしょうがないみたい」
「そんなわけっ、ぁ、ぅぁあぁ……！」
ずぶずぶと、ペニスの先端が私の肉を押し広げる。刃物を突き入れられたような激痛が私を襲った。
「い、や……いやぁ……やめろぉ……」
「一気にやっちゃいなさい」
「いやあああぁあぁぁぁっ!!」
ズボォ！
怪人が勢いよく腕を引いた。
メリメリメリ、と、肉を引き裂きながら、怪人のペニスが私の膣内、奥深くまで挿入される。
「うっ、ぁ、ぅぁあぁぁあぁぁぁぁぁっ!!　いっ、ああぁぁぁぁぁぁっ!!」
私は激痛に悶え、叫び声を上げた。
情けないと思う余裕はない。大勢の男達に見られているというのに、悲鳴をあげ、身体を暴れさせる。
「おおっ！　入った！」
「根元までみっちりだ」
「おい、見ろ！　血が出ているぞ！」

「本当に処女だったんだな」
男達から大きな拍手が湧き上がる。私の初体験を見て、皆が喜んでいた。
（くぅぅ……どうしてみんな、そんなに嬉しそうなの？　私はこんなに苦しいのに、どうしてそんな、笑顔なのっ……？）
私は激痛に耐えながら、男達を睨みつけた。悪に味方するこの者達が、憎くて仕方ない。
「処女を失った感想はどう？」
「ぐ……ルカンダっ……！　殺す、あなた、必ず殺してやる……！」
「あら、威勢のいいこと。その様子だと、激しくしても大丈夫そうね。さあ、遠慮はいらないわ。やっちゃいなさい」
「うっ、待っ――」
「オオオォォォ！」
８本腕の怪人は、雄叫びを上げると、私の身体を勢いよく上下に動かし始めた。
「ひぐっ！　うっ、があぁぁぁあっ!!　動かす、なぁぁあっ!!　んぎっ！　うごぉぉ！　んぎぃぃぃぃぃっ!!」

ぞぶっ！　ぞぶっ！　ぞぶっ！
怪人の太いペニスが、私の膣内を行き来する。私の身体が下がるたびに、ペニスの先端が膣の奥を抉るように叩いた。
激痛が、脳を焦がす。
「あぐ、ぁぎっ、ぃっ……！　ぐぁあぁぁぁぁっ!!　ぐっ、んぐぅぅぅ!!」

「どうしたの、アルフェリカ。痛いの？」
「ぐぁっ、ぐ……こんなの、大したこと、な――んがあぁぁぁっ!!　私は、っ……こんなことで、負け、んがっ、ぁ、ぁぁ……くぅぅう……負け、ないっ……負ける、ものかっ……！」
「あらあら。大分辛そうね。ダメよ、痛がらせちゃ。ちゃんと気持ちよくさせて、絶頂させないといけないんだから」
ルカンダが怪人をたしなめる。すると怪人は、私の胸やクリトリスへの責めを再開させた。
「んひっ、ぁ、ぅぁぁ……んっ、やっ、ぁ、揉む、なぁ……擦る、なぁ……！　んぁ、ぁっ、ぁぁっ……？　んっ、くぁ、んぁあぁぁっ……！」
胸やクリトリスへの刺激が、甘い快感に変わる。すると、私の膣内から、さらに愛液が溢れた。
（これ、愛液のせいで……ペニスの動きが……！）
じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！
怪人のペニスが愛液にまみれ、その動きが滑らかに変わった。すると、下腹部を埋め尽くしていた激痛と圧迫感が、徐々に薄れていく。
「んくっ、ぁ、ぁぁ……んぁっ、ぅ、ぁ……ぁぁ……んっ、くぁぁ……」
（なに、これ、お腹の中、熱く……だんだん、気持ちよく、なってる……？）
瞬く間に痛みは薄れ、代わりに湧き上がってきたのは快感だった。怪人のペニスに膣の奥を突かれ、膣壁を擦られ、粘膜への直接的な刺激が、快感を生み出していく。
ぞりゅっ！　ぞりゅっ！　ぞりゅっ！
ペニスの一突き一突きにより、膣の中で爆発的に快感が生み出されている。生み出された快感は瞬時に全身へと広がっていった。
「うっ、ぁ、これ、んっ、ぁあぁぁっ……！　これ、だめ、っ……ぁっ、ぐぅぅ……んっ、んぁっ、ぁ、ぁぅぅぅぅ……！」
「ふふふ。とっても気持ちよさそうよ、アルフェリカ。あなた、とってもセックスの才能がありそう」
「ぐっ、ぁぅぅ……そんな、ことっ、ぁ、ぅぁあぁぁ……！　これは、あなたの魔法で……感度がっ、ぁ、ぁあぁぅぅ……１０倍にっ、ぃぁぁぅぅ……！　んっ、ぁ、ぁぅぅぅぅ……！」
（身体を敏感にされていなければ、こんなことで、怪人のペニスなんかで、感じさせられたりなど、するものかっ……！）
私は歯を食いしばって、湧き上がる快感に耐えようとした。だが、その勢いは少しも弱まらない。怪人に突かれるたびに、性感が高まっていく。
絶頂が、近い。
「うっ、ぁ、ぁあぁぁ……！　こんなっ、んぁっ、いやっ、ぁ、ぁぁ、ぁぅぅぁあぁぁっ……こんなぁ……いやっ、いや、いやあぁぁぁ……！」
「アルフェリカ、どうしたの？　もしかして、イきそうなの？」
「ぁぅぅぅ……ぃっ、ひぅぅぅ……ぁ、ぁぁあぁぁぁ……私はっ、絶頂なんかっ、んっ、しないっ、ぁぅ、んっ、ぅぁあぁぁ……」

「イきそうなのね？　じゃあ、ラストスパートと行きましょうか。この生意気な魔法少女の顔を、無様なイき顔に変えてあげなさい！」
「んぎっ、ぅぁっ、そんなこと、んっ、ぁ、ぁあぁぁっ、さらに激しく……んぁあぁぁぁっ!!」
じゅっちゅ！　じゅっちゅ！　じゅっちゅ！　じゅっちゅ！
怪人の腕の動きが速くなる。私の身体が高速で上下し、同時に膣内のペニスがものすごい速さで私の中を抉った。
「ぁ、ぐ、ぁあぁっ、んっ、ぐっ、ぁ、ぁぅ、んぁあぁぁぁっ……！　これ、ぅっ、だめ、ぁ、ぅあぁぁぁ……奥、壊れる、んっ……ぁ、ぁあぁぁぁっ！　何か、昇って、んっ、ぁっ、来る、何か、来るぅ……！　ぁ、ぁあぁぁぁっ、ぁっ、ぁっ、ぁ……ん――イっ……ぁぁ……んっ、ぁあああぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁっ!!」
快感が、爆ぜた。
体内で快感が暴れ回り、私の頭の中を真っ白に染め上げる。全身の筋肉が弛緩し、宙に浮いているような錯覚に襲われた。
それが、初めての絶頂だった。
（これが、絶頂……気持ちよくて、ふわっとして、何も、考えられない……）
「ぁ、ぁぁ……んっ、ん……ぁぁっ……ぁぅぅ……んっ、くぅぅ……」
びくん、びくん、と、時折身体が小さく跳ねる。
口元から唾液が一滴こぼれ落ちたが、拘束されている今、それを拭うことはできなかった。
（絶頂、してしまった……魔力を、失ってしまう……）
私の体内にある魔力が、挿入されている膣を通じて、８本腕の怪人に流れ込んでいった。彼らはこうやって、犯した相手から魔力を吸収しているのだ。
「おおおおっ！　イったぜ！」
「身体中震えているぞ、よっぽど気持ちよかったんだな」
男達は、私が絶頂したところを見て、さらに気分を高揚させているようだった。
「く、ぅぅ……見る、な……見るなぁ……！」
「ふふふ。初めてのセックスで絶頂した気分はどう？」
「このぉ、っ……ルカンダぁ……！」
「いいわぁ。その悔しそうな顔。私はその顔をずっと見たかったのよ。ゾクゾクしちゃう」
ルカンダは恍惚の表情を浮かべながら身を震わせている。
「いくら悔しがっても、あなたの初めての相手がこの怪人だという事実はもう変わらないのよ。さあ、この子はまだ満足していないわよ。もっと可愛がってもらいなさい」
「な……まだする気――っぎぃぃぃっ!?　んんっ、ぁ、また、動いて……くひゅぅぅっ……！」
ずちょっ！　ずちょっ！　ずちょっ！
８本腕の怪人は、腕と腰の動きを再開させた。怪人のペニスが再び私の膣奥に突き刺さり、お腹に衝撃を加えてくる。
胸やクリトリスへの愛撫も継続されている。怪人の責めにより、私の身体に望まぬ快感が刻まれていく。

「ぁっ、んっ、ぐ……はぁぁ……っ、ぁっ、んっ、ぅぁあぅ……！　また、激しい、っ……そんな、奥まで、突くなぁ……！　んっ、ぁ、胸っ、触るなぁ……！」

四肢を怪人の腕に拘束されている私は、まったく抵抗することができずに、怪人の責めを受け続けた。快感が徐々に膨らんでいく。

（また、気持ちいのが、昇ってくる……！　嫌なのに……もう、絶頂したくなど、ないのにっ……耐え、られないっ……！）

「おい見ろよ、魔法少女のあそこ、愛液が飛び散ってるぞ」

「チンポが出入りするたびに溢れているな」

「気持ちよさそうな顔して喘いでいるぜ」

「やっぱり魔法少女ってのは淫乱なんだよ」

男達が好き勝手な言葉を投げかけてくる。

「くぁっ、んくっ、ひぐっ、ぁ……見る、なぁ……私は、んぁっ、淫乱じゃ、ない、っ……くひっ、んっ、ぁ、ぅぁぁっ……！　感度を操作されていなければ、感じたりなど、っ、んぁ、ぁ、ぁああぁぁぁぁっ!!」

（こんな、屈辱っ……！　アーク・デュランに味方する下衆な人間達に見られながら、犯されるなんてっ……！）

じゅっぐ！　じゅっぐ！　じゅっぐ！

怪人の責めは時間の経過とともに激しくなっていく。私の身体の上下に合わせて、紫色のスカートがばたばたと捲れあがっていた。

「ぁぐ、っ、んっ、ぁ、ぁぁぁっ……だ、だめ、ぇ、っ……んぁっ、また、何か、くるっ……さっきの、くっ、んんんっ……絶頂が、昇ってくりゅぅぅっ……！」

「またイくのね？　いいわよ、我慢せず何度でもイきなさい。あなたがイくたびに、魔力が手に入るのだから」

「くっ、うぐ、ぁ……ぁぁ……いやぁぁ……イきたくなんて、ないっ、のにっ……ぁ、ぁぁぁっ……！　気持ちいのが、我慢、できなくてっ……んんんっ、お腹、ずんずん突かれて、身体中の敏感なところ、責められてっ、んくっ……ぁっ、ぎぅ、んっ……ぁ、ぁぁ……！　だめ、私、イく……ぁっ、ぁ、ぁ――イくっ！　んっ、くぁああぁぁぁぁぁっ!!　イくっ！　イきゅぅぅぅぅぅぅぅっ!!」

びくん！　と、全身が大きく痙攣した。２度目の絶頂。快感が下腹部で弾け、腰ががくがくと揺れる。拘束された足の指先まで振動が走り、びりびりと痺れる。

（また、絶頂してしまった……魔力が、また、奪われていく……）

私の魔力が結合部を流れた。

絶頂すれば魔力を奪われる。それが分かっていても、溢れる快感を抑えることができない。敏感にされた身体は、怪人の責めに成す術なく絶頂してしまう。

「んぐ、ぁ、く、はぁ……はぁ……っ、ぅぅぅぁっ!?　ひぎっ！　また……動いて、っ、くぅぅぅぅんっ、ぁ、んっ、く、んんんんっ……！」

じゅちゅっ！　じゅちゅっ！　じゅちゅっ！

私が絶頂しても、怪人は私の身体を上下に揺らし続ける。

激しい抽送に、ペニスの先端がごりごりと私の膣壁を擦った。すると、大量の快感が溢れ、頭の中が気持ちいいという感覚で埋め尽くされる。

（く、だめ……気持ちいのが、止まらない……！　突かれるたびに、じゅわって、快感が溢れて……このままだと、何度でも絶頂してしまう……！）

「ぁぐ、んっ、っぁぅ……んっ、あぁぁっ……ぁっ、ぎっ、ふぎゅぅぅ……！　だめ、だめ……だめぇえぇ……もう、突くの、だめっ……私の中、深く抉るなぁ、っ……！」

「あらあら。怪人のおちんちんを咥えて愛液を撒き散らしているのに、何を言っているのかしら。本当はもっと気持ちよくなりたいんでしょう？」

「んぎっ、ぁ、ぅぁあぁぁぁっ……！　ちっ、違う……！　私は、気持ちよくなんて、なりたく、っくひぃぃぃっ！　んっ、やっ、激し、んっ、ぁ、ぅぅぅぅぅっ……！　んっ、ぁ、だめ……こんなの、もう、いやぁぁ……！」

「さあ、何度でもイきなさい」

「んっ、ぁ、イきたくないっ……イったら魔力が……んぅ、ぅぅぁぁあぁっ……イきたく、ないっ、イきたくなんか、ない、のぉぉぉっ……！　んぁあぁぁぁぁっ……！」

口では拒んでいても、身体の方はもう、限界に来ていた。快感のうねりを食い止めようとしても、胸、膣、クリトリスの多方向から襲いかかる刺激に、成す術がない。

そして私は、３度目の絶頂を迎える。

「ぁっ、ぁ……あああぁぁぁっ……んっ、ぁっ、ぁ、んっく、ぁあぁぁぁぁぁっ……だめ……もうだめっ……！　んぁっ、く――イ、っ、ぐぅ――」

びくん、びくん！　身体が小刻みに震えた。

「ぁ……イっ、でりゅぅ……んんっ、ぁ……ぅぁ……イっちゃってるぅ……」

柔らかな羽毛で全身を包まれたような、幸せな感覚に包まれた。快感が体内を波紋状に広がっていき、私の身体はびくびくと痙攣する。

「んっ、ぁ、いや……もう、やめ……っぐ、んぁあぁぁぁっ……！　まだ、動いて、んんっ……！　私、イってるのに……んぁっ、んっ、ぅくぅぅぅんっ……！」

私が絶頂している最中も、怪人は抽送を続けた。絶え間なく快感を重ねられ、私は絶頂したままの状態を維持させられていた。

（これ、だめ……ずっと絶頂したままで、魔力が、どんどん失われていく……！）

じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！

ペニスに一突きされるだけで、私から魔力が漏れていく。この状態が続けば、みるみる魔力が減少してしまう、そう思った時、

「んぐ、ぁ……ぁぅぁぁ……っ、んっ、くぅぅ……はぁ、はぁ……んぐっ、止まっ、た……？」

突然、８本腕の怪人の動きが止まった。胸やクリトリスから手が離され、刺激がぴたりと止む。

昇り詰めていたままだった私の感覚が、ゆっくりと元の状態に戻っていく。

「っ、ぁ、く……はぁ……っ、んっ、ぐ、はぁ……っ……」

（これで、終わり……？）

その予想は半分正解で、半分誤りだった。

「満足したようね」

ルカンダが８本腕の怪人の肩を、ぽん、と叩く。

「満足……？」

「この子たちが魔力を蓄えられる量には、限りがあるの。もう限界まで魔力を吸収したから、これ以上あなたを絶頂させても、魔力は奪えないわ」
　ずるり。怪人のペニスが勢いよく引き抜かれた。
「んっ、くひゅぅぅぅぅっ！」
　ペニスが膣口から引き抜かれる刺激に、私は思わず声を漏らしてしまう。
「ふふふ。可愛い声だったわよ、アルフェリカ。おちんちんを抜かれただけなのに、そんなに気持ちよかったの？」
「くっ……そんなわけ――」
「それじゃあ、交代ね」
「――!?　交代って――んぁあぁっ!?」
　８本腕の怪人が私から手を離した、次の瞬間、背後から粘液まみれの怪人が覆いかぶさってきた。
「いやっ……！　放れろっ……！　ぅっ、ぁぁ……べたべたしたものが、纏わりついて、っ、ぅぁあぁぁっ……！」
　粘液怪人の体が、私の背中に張り付く。おぞましい感触。私は怪人を引き離そうとしたが、粘液はがっちりと固まって剥がれそうにない。
（この怪人、粘液の硬度を自由に変化させている……！）
　私は粘液怪人に体重をかけられ、その場で四つん這いの姿勢をとらされた。背中全体がべっとりと怪人と密着している。
「次はこの子に犯してもらいなさい」
「何を言って……っ、くにゅぅぅぅぅっ!?」
　ぬるり。粘液怪人のペニスが私の膣内に滑り込んだ。そのペニスは粘液でぬるぬるになっており、何の抵抗もなく、私の膣奥へと到達する。
（これ、粘液、滑って……！　すごい速さで、奥まで届くっ……！）
　じゅっ、じゅっ、じゅっ、じゅっ！
　粘液怪人が腰を振ると、ペニスが激しい水音を立てながら、私の膣壁を擦った。愛液と粘液が混ざり合った液体が結合部から飛び散り、私のふとももやスカートの内側を濡らしていく。
「あぎっ、んっ、んんっ……く、ぁ……これ、っ、だめぇぇぇ……ぐりぐりされると、お腹の中、きゅんって、ぁ、ぁぅ、んぁ、ぁあぁあぁぁぁっ……！」
　先ほどの怪人よりもペニスは小さい。だがそのせいで、粘液のぬめりと合わさって、抽送が容易になっていた。ぬめりを利用した高速運動に、私の膣内が激しく擦られ、じゅるじゅると愛液を分泌し続ける。
「んぁっ、ぁっ、くぁあああぁっ……！　ぁ、ぅぐっ、んんんんっ……！　んぁっ、ぁ、ぁああぁぁぁぅぅ……」
「どう？　さっきの子と、どっちが気持ちいいの？」
「ぐっ、ぁんっ……こんなの、全然、気持ちよく、んっ、く、ぃひぅ……」
「あら、気持ちよくないって言われているわよ。もっと激しく突きなさい」
「オォオオォォ！」
「んっ、ひぐっ……そんなに速くしたら……っくぅぅぅぅぅぅっ……！」

じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ！

怪人の腰の動きがさらに速くなる。それに伴い、私に与えられる刺激、すなわち快感の量が増していく。

（く、だめ……この速さで突かれ続けたら、私……この怪人にまで、絶頂させられてしまう……！）

「んっ、く、ぅうぅぅっ、ぁ、んぁあぁぁあぁぁっ……！　ぬるぬるがぁ、お腹の中いっぱいになって……んっ、腰の動きが激しくて……んぁっ、く、ぅぅ、ぁ、ぁあぁぁあぁぁぁぁっ！　だ、だめ……また、イく……イくっ！　っ……ぁ――んぁっ、イ、くぅうぅぅぅぅぅっ!!」

快感の波に打たれ、私は大きく身体をのけ反らせた。

身体を支えていた両腕の力が抜ける。しかし、背中が粘液怪人に張り付いているため、その場に崩れ落ちることができない。私はだらりと両腕を垂らした状態で、快感に身を震わせた。

「ぁ……ぅ、ぁぅ……んっ……く、ぁ、ぁぁ……」

唾液がこぼれ、顔の真下に複数の円状の染みを作った。そして股間の真下には、大量にしたたった愛液が水たまりを作っている。

（また、魔力が奪われていく……快感に、逆らえないっ……！）

一呼吸置いて、再び怪人が腰を振る。背後からの突き入れに対し、私はまったく抵抗することができない。

じゅっぐ！　じゅっぐ！　じゅっぐ！　じゅっぐ！

「ぁぅ、んっ、ぁ、ぅぁあぁぁぁぁ……また速いぃぃ……んっ、おっ、ぁ、んぁあぁあぁぁぁっ……！」

「気持ちよさそうねえ。もうイきそうになってる。いいの？　イったらまた魔力を奪われるわよ？」

ルカンダが楽しそうにこちらを見ている。私がもう、快感に抵抗できなくなっていることを知りながら、あえて煽るようなことを言っているのだ。

しかし、私には、ルカンダに反論する余力は残っていない。彼女を弱々しく睨みつけてはいたが、湧き上がる快感により、今にも絶頂へと押しやられようとしていた。

（もう、イきそう……気持ちいの、止められない……また、魔力が、奪われる……！）

「ひぐっ、んぁっ、ぁぐ、んっ、っぁ、っっ、んっ、ん、っぁあぁぁぁぁっ……！　くるっ、くるっぅっ……！　ぁ、ぁ、ぁあぁ、ぁあぁぁっ！　イっ……ぁ……っ――きゅぅぅぅぅぅぅぅっ……!!　また、イってりゅぅ……」

昇りつめ、視界も頭の中も真っ白になる。

私の絶頂に呼応して騒ぐ男達の声が、かすかに耳に届いた。

長い絶頂。魔力がみるみる失われていく。やがて絶頂が終わろうかという、そのタイミングで、

「ひゅぎぃぃぃぃぃぃぃっ!!」

さらに速い抽送に襲われた私は、再び絶頂した。

「ぁ……ぁぁ……んぐっ、っ、ぁぁあぁ……またイって……んぁっ……」

（私の身体、簡単に絶頂してしまう……もう、いやあぁぁ……）

さらに奪われる魔力。そこで、粘液怪人の抽送が止まった。
「……？」
「あなたもお腹一杯？　それじゃあ交代ね」
ルカンダがそう言うと、粘液怪人は私を張りつけたまま立ちあがる。粘液怪人の身長が私より高いため、立ちあがったことにより私の足が床から離れた。
私の両手両脚が、ぶらりと垂れ下がる。連続での絶頂により体力を失っている私には、その手脚を動かすことすらできない。
（交代……あと、残っているのは……）
その時突然、私の片方の脚が持ち上げられた。脚を持たれる感覚はあるのに、持っている相手の姿が見えない。
（透明、怪人……！）
「放せっ――んくぅうぅうぅぅぅぅっ!!」
縦に開いた股の間、私の膣に、ペニスが挿入された。だが、そのペニスも透明になっており、視認することができない。
「おお、魔法少女のおまんこ、ぱっくり開いて奥まで見えるぞ！」
「マジか！　俺にも見せろ！」
「すげえ、愛液がいっぱい溢れ出てるぜ」
「透明になる怪人のチンポで奥まで広げられてるのか……エロいな」
男達が私の秘部を見ようと、身を屈める。身体の中を凝視され、私は恥ずかしさで顔を逸らした。
「やめろっ……そんなところ、見るなっ……！　私の中まで、見るなぁぁ……！」
私は目の前にいるはずの透明怪人を引き剥がそうとした。手には相手を掴む感触がある。しかし、ステッキを持たない私には、その体を引き剥がすだけの力はない。
じゅぶ！　じゅぶ！　じゅぶ！　じゅぶ！
透明怪人が腰を動かし、抽送を開始する。ペニスが私の中を出入りするたびに、丸見えの膣内から愛液が飛び散る。それを見て、さらに男性達が喜び、騒ぎ立てる。
「んぁっ、く、ぅぁあぁぁ……やめっ、んぅ、んくっ……これ、いやぁぁ……あっ、ぁ、んぁああぁぁぁっ……！」
（私の恥ずかしいところ、奥まで見られている……こんな辱めを受けるなんてっ……！）
じゅぐ、じゅぐ、じゅぐ！　透明怪人が激しく腰を振り、私の身体を揺らす。私の膣内にある、粘液怪人の残した滑らかな液体のせいで、ペニスの抽送がすんなりと行われていた。
「んっ、ぐ、ぁぁあぁ……奥まで、突き上げるな、っ……く、ぁあぁ……んっ、ひっ、ぁ、ぅぅうっ……！」
激しい突き入れ。ペニスの先端が膣壁を、膣奥を抉り、私に快感を叩き込んでいく。
その時、黒い胸袋が上にずれ、露出した乳房を何かが掴んだ。
「んひゅっ!?」
不意打ちに、高い声が漏れてしまう。
透明怪人が、私の胸を揉んでいるのだ。透明怪人は私の片脚を、腕の部分を使って持ち上げており、手のひらは自由に使える状態になっていた。

（私の胸……見えない手に揉まれて……まるで生き物みたいに……）

くにくにと、透明怪人に揉まれている両胸が形を変える。指の跡が胸を滑り、甘い快感を生み出していく。

「ぁぅ、んっ、このっ、揉む、なぁ……！　私の胸、触るなぁ……！」

私は透明怪人の腕を掴んだ。少しでも動きを阻害しようと力を籠める。

しかし、その行為に効果があるのかは疑問だった。私の妨害など気にも留めずに、胸を揉み続けてくる。

「くぅう、ぁぅ、んっ、やめ……んっ、放せぇぇ……っひん!?　ぇ……？　これ、粘液、垂れてくるっ……！」

突然私の胸の上に、ぽたぽたと液体が滴り落ちてきた。頭上を見ると、背後の粘液怪人が手を掲げ、手のひらから粘液を垂らしている。

どろりとした粘性のある液体が、私の胸を濡らした。上にずらされている黒い胸袋も粘液まみれになり、鎖骨周辺にべっとりと張り付く。

「んひっ……粘液が、絡んで……っ、く、ぁあぁぁんっ……！　これ、ぬるぬるして、気持ち、悪いっ……！」

透明怪人の手によって、粘液が私の胸に塗りたくられていく。ぬるぬるとした感触が胸全体を包み、透明怪人の指の滑りが滑らかになる。

指先が乳首を弾くと、丸い胸がたぷんと揺れた。

「くひぃゅんっ！　んっ、乳首、弾いては、んっ、ぁ、だめ、っ、んんんっ……！」

乳房を激しく揉まれ、粘液がぐちゅぐちゅと音を立てる。

私はもう一度手を引き剥がそうと、精一杯の力を籠めた。すると……

べちょり。

背後の粘液怪人が私の両手を掴み、頭上へと持ち上げる。

「んっ、っ、ぁ……っ、放せっ……このぉっ……んっ、くぅぅっ……！」

怪人の手は、粘液にまみれており、私の手の甲に張り付いて離れない。私は両手を頭上に掲げた無防備な状態で、透明怪人の責めを受け続けた。

じゅぐっ！　じゅぐっ！　じゅぐっ！

透明怪人は胸を撫でまわしながら、ペニスを膣奥まで勢いよく突き刺してくる。透明なペニスが突き入れられるたびに、膣壁がぐにぐにと押し広げられる様子が、目の前の男達に筒抜けになっていた。

「ぁぅっ、んっ、んんんんっ……見る、なっ、んぁぁ……くひゅぅ……っ、んくぅぅぅっ……！　いやぁぁ……そんなに、見るなぁぁ……！」

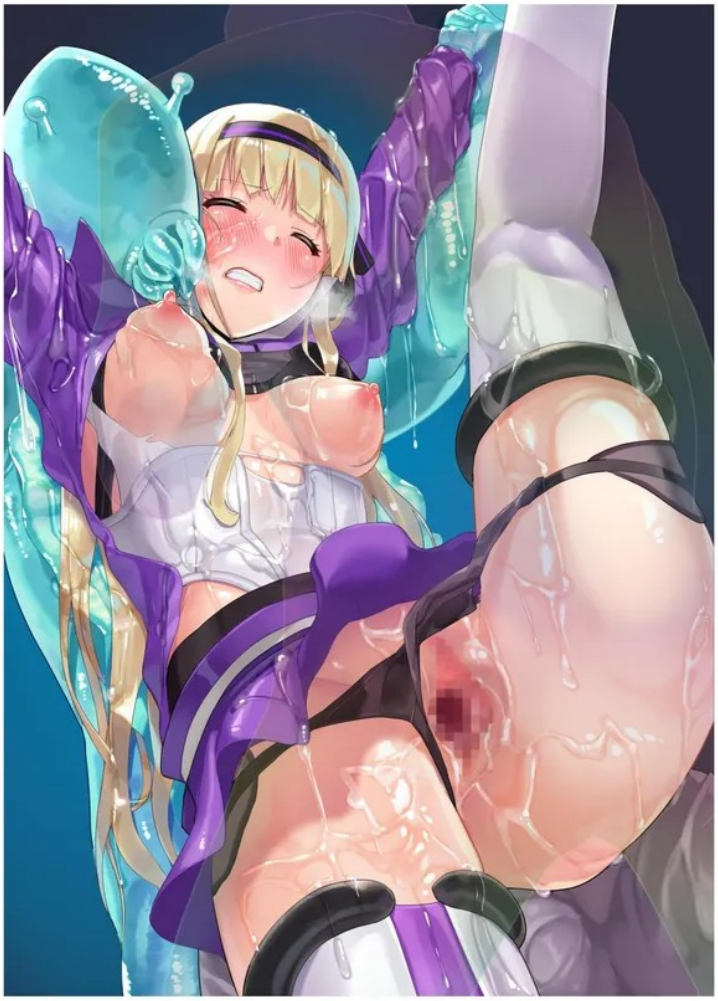
私がいくら拒絶しても、男達は視線を釘付けにしたまま、いやらしい笑みを浮かべている。あまりの恥ずかしさに、体温が上昇していくのを感じた。敏感な身体が、ますます感じやすくなっていく。

「くっ、んぁ……ぁ、ぁ、ぁぅぅぅっ……だ、だめぇぇ……怪人に犯されるところ、見られながら、っ、気持ちよくなるなんて、だめ……んっ、ぁっ、んぁあぁぁっ！」

ぽたぽたと、粘液怪人からぬるぬるの液体が垂れ続けている。初めは胸部だけを濡らしていた粘液が、徐々に垂れ落ちていき、今や全身に行き渡っていた。

魔法少女の衣装……ロープやスカートに粘液が染み込み、私の肌にぴたりと張り付いて

いる。天井からの照明が、衣装に付着した粘液で跳ね返り、私の身体をきらきらと輝かせていた。



（全身が、粘液にまみれて……ぐちゃぐちゃに、されている……）

ぐっちゅ！　ぐっちゅ！　ぐっちゅ！

怪人のペニスが滑らかな動きで膣の奥まで届き、膣奥……子宮口を叩く。お腹への一突き一突きが、身体の奥底から快感を溢れさせる。

「んくっ、っ、ぁ、ぁあぁぁぁぁっ……！　んぐっ、奥、んんんっ！　奥、突くなぁ……ぁ、ぁ、うぐっ、んっ、ぁ、ぁひぃぅぅぅっ……！　もう、やめ、っ、ぁ、ぁ、ぁうぅぅぅぅ……！」

一定のリズムで刻まれる膣への抽送。否応なしに高められていく性感。

やがて、私は快感の高みへと達する。

「ぁぐっ、ぁ……！　ぁ、っ……！　だめ、んっ、ぐぅぅぅ……！　だめ……だめ、っ……ん――ぎっ！　ぁ、ぅぁ――っぐ！　イ、イくぅ……んきゅぅぅぅ……！」

行き場をなくした快感が体内で暴れ回った。

びくん、びくん！　全身が痙攣し、小刻みに身体を跳ね上がらせる。

「い、や……わたひ、またイって……んきゅぅぅぅっ！　ぁ、ぁあぁぁぁぁっ!!　今突いちゃ、だ、めぇっ……んっ、くぁあぁぁぁぅぅっ！」

ずじゅっ！　ずじゅっ！　ずじゅっ！

透明怪人の抽送が止まらない。私は絶頂の中、さらに快感を与えられ、首を振って悶え

た。過剰な快感が胸を締め付ける。
「ぁ、ぅ、くぁぁ……もうやめろっ……んっ、くぅぅぅぅぅ……んぎっ、がっ、ぅぁぁぁぁぁぁっ！　もう、突くなぁ……ぅぅぅ……」
ペニスの抽送がもたらす快感により、みるみる性感が高まり、私はあっという間に絶頂寸前まで追い込まれた。
（今イかされたら、快感が多すぎて、私、おかしくなってしまう……イきたくないのに、中をごりごりと削られて、快感が、止まらない……！）
「んぁぁぁぁぁぁっ……んぎっ、ぁぐ、っぁぁぁぁぁ……ぁっ、ぁぁぁぁっ……！　だめ、だめ……抑え、られないっ……んっ、んっ、んぁぁぁぁぁっ……イ、くぅ……イくっ！　イぐぅぅぅぅぅぅぅぅっ!!」
背中を強烈な痺れが走り抜け、後頭部に鋭い衝撃が叩きつけられた。快感が脳内を埋め尽くし、〝気持ちいい〟という感覚に全身が支配される。
「ぁ……ぅ……ぐぅ……んっ……ぁぅぅ……これ、だめぇ……んぁっ、ぁ、ぁぁぁぁぁっ！　まだ、動いて、っくぅぅぅぅっ……！　ひぅっ、んっ、くぁぁぁぁぁっ！」
私の絶頂は、透明怪人にとって責めを止める要因にはなっていないようだった。
じゅぐっ！　じゅぐっ！　じゅぐっ！　じゅぐっ！
容赦なく、胸を撫で廻し、ペニスを突き入れ、追加の快感を送り続けてくる。
「ぁぅぅっ、んっ、くぅぅぅ……ひぅっ！　んっ、ぁ、ぅぅぅ……もう、だめ……気持ち、いぃ、っ、んぐぁっ、ぁ、ぁ、んくぅぅぅぅっ……！」
「ふふふ。気持ちいいのね？　いいのよ、もっと素直になりなさい。もっともっと、気持ちよくなるのよ」
「んぁっ……く、そんなの……うぁぅ、く……私は、気持ちよくなんて、なりたく……っひぃぃぃぃんっ！　ぁ、ぅぁぁぁぁぅ……だめ、そんなに、激しく、突いちゃ……っぁぁぁぁぁぁぅぅぅ……！」
透明怪人の腰の動きが、さらに激しくなる。ペニスの先端が鋭く膣壁を擦り、生み出される快感が膨れ上がった。
（これ、だめ……気持ち、よすぎるっ……！）
「んぁぅ、ぁ、く、ぅぁぁぁぁぁっ！　んひっ、んぁっ、ぁ、ぅぁぁぁぁぁっ……だめ、また、流される……んぁっ、ぁ、くるぅぅ……快感が、また、くるっ……んっ、ぐ、ぁぅぅぅっ！　ぁっ、ぁ、ぁぁぁぁぁぁぁっ！　イっ……ぅぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
びくびく、びくん！
絶頂までの間隔が、どんどん短くなっている。
絶頂中は、頭の中が真っ白になり、何も考えられなくなっていた。私の絶頂中も、透明怪人は腰を振り続け、絶え間なく快感を送り込んでくる。私は長い間、身を震わせながら、絶頂の浮遊感を味わっていた。
もはや絶頂していない時間よりも、絶頂している時間の方が長いように感じられる。絶頂の間は、透明怪人に魔力を奪われ続けていた。
「うぁぁ……んっ、ぐ……ぁぁ……魔力が、どんどん減って……んっ、くひぃぃ……」
じゅちゅっ！　じゅちゅっ！　じゅちゅっ！
怪人の激しい抽送が私の腰を打ち、膣が勢いよくペニスの形に広がった。ペニスを包み

込む肉壁が悦び、下腹部で大きな快感が弾けた。
「んぁっ、ぁ……ぁぅっ！　ひぎゅぅうぅぅっ……！　だめ、イったばかり、なのにっ、んぁあああぁぁぁぁっ！　またイくっ、イくっ……イっくぅうぅぅぅっ!!」
２体の怪人に挟まれた身体が大きく跳ねた。
大きな絶頂の波が私を襲う。
「あぐ……んっ、ぐぁぁ……っ、ん……ぁ、ぁぁ……」
これ以上続けられたら、私の意識が持たない。そう思った時、透明怪人の責めが終わった。限界まで魔力を吸収したのだ。
「くひゅぅぅんっ……！」
透明怪人はペニスを引き抜くと、どこかへ離れていった。
さらに、粘液怪人が粘液の粘度を操作したのか、私の身体が粘液怪人の体から、ずるりと滑り落ちた。
「うぁっ！」
べちゃり。私は足元に溜まっていた粘液だまりの中にうつ伏せに倒れる。
私を拘束するものは、今、何もない。しかし、度重なる絶頂で体力を根こそぎ奪われていた私は、指一本動かすことができずに、倒れたまま荒い呼吸を繰り返していた。
「んぐ、ぁ……く、ぁぁ……っ、はぁ……はぁ……」
そんな私の背中を、ルカンダの靴が踏みつける。
「ぁぐぁあぁぁっ！」
「ふふふ。いいザマね、アルフェリカ。あなたが怪人に犯されて、無様に絶頂するところが見られて、最高だったわ」
「く……ぅ、ぅぅ……」
（魔法で身体が敏感になっていなければ、絶対に感じたりしないのに……こんな、屈辱……！）
ルカンダが私の背中を、足の裏でぐりぐりと踏みにじっている。
過去に何度か彼女と戦ったことがあるが、常に私の圧勝だった。一度たりとも、このように彼女の前で地に顔を付けたことはなかったのに。
私は悔しさで、唇を血が出るほど噛みしめる。
「さて、アルフェリカ、あなた、まだ魔力が残っているみたいね？」
「……？」
怪人に犯され、私は大量の魔力を失った。しかし、私はまだ、魔法少女への変身状態を維持している。
体感では、現在の私の魔力量は、私が体内に蓄えられる魔力のおおよそ半分にまで減少していた。
「怪人達はこれ以上魔力を吸収できないし、バイオ兵はあなたが倒しちゃったからここには残っていないし……どうしようかしら？」
ルカンダの問いかけは、私にではなく、集まっている男達に向けられていた。すると、男達がこれまでで最大の雄叫びを上げる。
「うおおおぉぉっ!!　待ってましたぁぁっ！」
「俺達がアルフェリカちゃんを気持ちよくさせるぜぇぇぇぇ！」

「俺に犯させろおお!!」
男達の欲望に満ちた視線が、倒れる私に注がれる。
（まさかこの男達、私を凌辱するために、集まって……！）
「うっ、ぁ……だめ、っ……そんなの、許さない、っ……」
「ふふふ。アルフェリカ、あなたにはもう、決定権はないの。今からあなたは、ここにいる男達、全員に犯されるのよ」
「っ……！　うっ、くぁあぁぁ！」
ルカンダが私の首を後ろから掴み、強引に立ちあがらせる。
「このまま彼らに犯させても、魔力を集められないから、ちょっとしたおまじないをあげるわ」
「ぁ、っ……何を、っ……！」
ルカンダが私の背中に指を這わせる。先ほど、感度が１０倍になる魔法を刻んだ時のように、くにくにと指を動かした。
「これでよし。あなたにもう１つ紋様を付けてあげたわ。この紋様が付いている状態でイっちゃうと、絶頂して体から魔力を放出した時、それが私に流れてくるの。これで彼らにイかされても、魔力が無駄になることがないわ」
（私が絶頂すると、放出された魔力がルカンダに流れる……？　この女に魔力を奪われるなんて、絶対に嫌っ……！）
「くぅぅっ……私は、下衆な男達の手で、絶頂したりなんか、しないっ……！」
「あら？　まだ強がる余裕が残っていたなんて、驚きね。感度が１０倍になったあなたの身体で、イかずに済むわけがないでしょう？」
「それでも、私は……耐えて、みせるっ……！」
「へぇ……？」
私の言葉を聞いて、ルカンダが加虐的に笑った。そして私は、強がったことを後悔することになる。
「それじゃあ、感度が１０倍になる紋様を、もう１つ重ねちゃおうかしら」
ルカンダの指が再び首筋に触れた。既に紋様が描かれている場所をなぞるようにして、指先が這いまわる。
「……！　待っ――っぁ!?　ぁ、んぁあぁあぁぁぁっ!?」
紋様が刻まれた瞬間、私の身体を、まるで電撃に撃たれたかのような衝撃が襲った。
「１０倍かける１０倍で、１００倍くらい感じるようになったと思うわ。これで下衆な男たちの手でもイけるわよね？」
「くっ、ぁきゅぅぅぅ……！　ぁ、これ、やめ、っひぃぃんっ……身体中敏感になりすぎて……ぅぐっ、おかしく、なる、っ……」
「これでしっかり感じられるわね。それじゃあ、存分に可愛がってもらいなさい」
「ぁぁっ――」
どん、と、ルカンダが私の背中を押す。私の身体が倒れた先には、男達が待ち構えていた。私の身体に、男達が一斉に群がってくる。
「んきゅっ、ぅ、んぁあぁぁ!?　やめ……んっ、離れ……んくっ、くひゅぅぅぅっ！」
私を取り囲んだ男達が、体を密着させ、身体に手を這わせてくる。何十本もの手による、

全身への愛撫。敏感になった肌は撫でられただけで快感を覚え、私は淫らな声を漏らしてしまう。

「んぁあぁぅっ……ぁぅっ、だめ……そんな、触ったら、んぁっ、ぁ、っ、んくぅぅぅぅっ……！　ぁっ、ぁ、ぁあぁぁっ……いや、っ……ひぅぅぅっ……触られただけで、気持ちよく、っ、くひぃぃぃゅっ！　ぁ、ぁぅっ……ぁあぁぁあぁぁっ！」

男達の手の動きに躊躇や遠慮はなかった。ただ自らの欲望のままに、私の身体を蹂躙しようとしている。

彼らは乱暴な手つきで、魔法少女の衣装を脱がしていった。ロープや破れた肌着が引き下ろされ、肩と、背中の上半分が露出する。露出した肌を直接撫でまわされ、私は男達の体に挟まれながら、びくびくと身を震わせた。

「ぁぅっ、くぅぅぅっ……もう、やめろぉ……これ以上、触るなぁ……！　んぁっ……んくぅぅぅぅぅぅっ!!　ぁ、だめ……胸、そんないっぺんに……ぅぁあぁぁっ……揉むなっ……このぉぉっ……」

複数人の手のひらが、私の乳房を奪い合うようにして揉みしだいた。感度を跳ね上げられた身体は、その乱暴な手つきによる刺激でさえも、甘い快感へと変換し、私の思考力を奪っていく。

全包囲から男達に密着され、私はその場に倒れることすら許されなかった。嵐のような責めに対し、ただ身を震わせることしかできない。

百戦錬磨の魔法少女は、もうここにはいない。今の私は、男達にされるがままになっている、哀れな小娘でしかなかった。

（こんな、下衆な、男達にっ……触られて……抵抗できないなんて……！　魔法が使えれば、ステッキさえあれば……こんな奴らなんかに、好きにはさせないのに……！）

「んぁぅぅ、っ、くぐぅぅぁぁっ……ぁ、ぁぁ……！　だめ、これ以上は……もう、やめろぉ……ぁ、ぁあぁぁ……んひぁっ！　だめ、そこは、触っちゃ……ぁ――んぁあぁぁあぁあぁぁっ！」

１本の腕がするりと私の股の間に滑り込み、指が膣内へと突き刺さった。その数２本。指を突き入れた男は、乱暴に私の中をかき回す。

ぐじゅ、ぐじゅ、ぐじゅ、ぐじゅ……！

「んぁあぁぁあぁぁっ!!　中、もっと敏感に、っぁあぁぁあぁぁっ!!　だめ……だめぇぇぇぇぇっ！　そんなに擦られたら、ぁ、ぁ、ぁあぁぁっ！　私の中、そんなにじゅぶじゅぶするなぁあぁぁっ!!」

感度を１００倍にされた私の膣内は、無造作な愛撫でさえも、尋常ではない量の快感を生み出した。指が私の中で蠢くたびに、頭の中で快感が弾ける。

「んくぁあぁぁっ！　んひっ、っぁ、っぎぃぃぃっ……！　強すぎる、っ……これ、刺激、強すぎひぃぃぃ!!　ぁ、んぁあぁっ……！　これだめ、だめ、だめ、っ……イくっ、指でかき回されて、私、イく――んぎゅぅぅぅぅぅっ!!　イくぅぅぅぅぅぅぅっ!!」

下腹部から脳天までを快感が突き抜け、私は男達の体の間で痙攣を繰り返した。全身から一気に力が抜け、私は男の肩に顔を預けてしまう。

「ちゃんと魔力は流れてくるわね」

魔力が体から抜け落ちていく。ルカンダの紋様が正常に作動しているのか、彼女は満足そうに舌舐めずりをしている。
「さあ、もっともっと、魔法少女をイかせなさい」
ルカンダが男達に指示を出す。
「分かりました！」
「そろそろ犯そうぜ。俺、もう我慢できねえよ」
「この体勢だと、挿れるのが難しいな」
「じゃあ、これ使おうぜ」
１人の男はそう言いながら、細長い机のようなものを引きずってくる。
「う、ぁ……くっ……ぁあっ？　何を――くぁぁっ……！」
男達は無造作に、私を机の上に押し倒した。私は起き上がろうと試みたが、周囲の男達によって、両手を机に押し付けられ、抵抗を封じられてしまった。
「くぅぅ……放せ、っ……ひっ、な、何を……？」
１人の男が、私の下半身側に立ち、片方の脚から手早くショーツを引き抜くと、私の両脚を掴んで持ち上げた。
その時、私は気付いた。その男の股間に、男性器、ペニスが露出していることに。そして、そのペニスの先には、私の女性器、膣の入り口があるということに。
「いっ、やぁぁ……！　くぅぅっ、やめ、ろぉっ！　そんなもの、いれる、なぁぁぁっ……！」
私は机の上で力の限り暴れたが、両脚を持たれ、両手を机に押し付けられている状態では、男の挿入を防ぐには至らない。
「いくぞぉぉっ！　おらあぁぁっ！」
「やめろおぉぉぉぉおっ!!」
ずぶり！
男が勢いよく腰を前に突きだすと、ペニスが膣内を抉った。
「んっ――ぎゅぅぅぅぅぅっ!!」
ドロドロに濡れた私の膣は、簡単に男のペニスを飲み込んでしまう。敏感になった身体がペニスを欲していたかのように、膣の内壁がペニスへと絡みついていく。
「おお……すげえ締めつけ……おまんこの中、熱くて、すげえ気持ちいい……！　こんなにエロいおまんこ、初めてだ」
「うぅ……そんなこと、言う、なぁ……くぅぅ……このぉ、抜きなさい、っ……ひぅ!?　ぁっ、ぁっ、ぁあああっ！　動かしたら、っあああぁぁぁぁぁぁっ!!」
じゅっぶ！　じゅっぶ！　じゅっぶ！
男が激しく腰を動かし始めた。反り返ったペニスの先端がお腹の内側をごりごりと擦り、快感が勢いよく身体中を駆け巡っていく。
膣内から大量の愛液が分泌され、股間から溢れて床へと垂れ落ちていく。
「んぁぅぅ、っぁあぁぁ！　ぁぅ！　んきゅぅぅ……！　ぁ、ぁ……もう、やめろぉ……突くな……突くなぁ……！」
（乱暴な男の抽送で、こんなに感じてしまうなんて、屈辱だ……！）
男は自分が快楽を得ることだけを考えているといった表情で、がむしゃらに腰を打ちつ

けてくる。だが、そのような責めであっても、感度を限界まで高められた私の身体は大量の快感を生み出していた。

じゅぐぶっ！　じゅぐぶっ！　じゅぐぶっ！

男が腰を振るたびに下腹部がきゅぅっと収縮する。

「ぁぐ、ぁ、ぁああぁぁぁっ、んっ、ぁ、だめ……ぁ、ぁ……！　イ――く……イくっ……下衆な男に、犯されて……でも、気持ちよくて……ぁっ、ぁ、ぁあぁぁ……！　だめ、イくっ！　イ、くぅ――んっ!!　ぁ――っ……ぁあああああああああぁぁぁぁっ!!」

びくん、びくん。

絶頂により身体が大きく跳ね、机を軋ませた。

「ぁ……ぐ……んっ……ぁぁ……ぅ……んくっ……」

身体の痙攣が止まらない。巨大な絶頂の波に意識が飲み込まれ、頭の中が真っ白になる。

「んぃぃぃぃぃぅっ……ぁぁ……だめ……動いてる……んぁっ……私、イってるから……止まってぇ……」

「お前がイったとかどうでもいいんだよ。こんな気持ちいいこと、やめるわけないだろ」

男は私のことを、人として見ていないのだと、私は悟った。まるで私が、快感を与えてくれるだけの人形であるかのように、乱暴に扱っている。

この男だけではない。私を囲む男達の全てが、私のことを性欲処理の道具としか見ていない。

（この世界は、狂ってる……！　世界を支配しようとする悪に協力して、その悪を倒そうとしている私を犯すなんて……この世界の住人がこんなに愚かだと知っていたら、私はこの世界を救いには来なかった……！）

「んぁぅ、ぁっ、んぁぅ、激し、ひぃぃ……ぁっ、ぁ、あああぁぁんっ……！　ぁぅぅ、だめ、ぇぇ……また、気持ちよく、なりゅぅぅ……ぁ、ぁあぁぁ……もう、やめ、っくぅうぅぁあぁぁぁぁっ!!」

周囲から男の手が伸び、私の胸を揉み始めた。まるで、暇だから揉んでおこう、といった無造作な行為だった。

私の身体が玩具にされている。そう思うと、ますます屈辱感が高まっていく。

だが、いくら悔しく思っても、身体は快感を求めて淫らに反応してしまう。

「ぁぐ、んっ、ぁあぁぁ……乳首、抓ったら、だめ……んぁあぁぁぁっ……く、だめって、言っている、のにっ……くっ、ぁ、ぁぅぅぅ……ぁぁ、ペニス、深く、奥まで届いて……っ、ぁ、ぁあぁぁっ……！　耐え、られなひぃぃぃ……私、また、また、っ……」

私は絶頂の気配を感じ取った。瞬く間に背後に忍び寄り、私を快感の坩堝へと叩きこむその感覚を、防ぐことはできない。

ただ流されるままに、享受するしかないのだ。

「だめ、だめだめ……ぁ、ぁあぁぁっ！　イくっ、イ……イくっ！　イく、イくぅぅぅ……ぁっ!!　ぁ……きゅぅぅぅ……んぁあぁぁぅ……」

私は静かに身体を震わせる。

絶頂の感覚が頭の中に染みついていく。このままでは、気持ちいいことしか考えられない身体になってしまう。

自分が自分でなくなっていく恐怖に、押しつぶされそうだった。

じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！

そんな私のことなどお構いなしに、男は腰を振り続ける。そして、

「そろそろ出すぞ！」

「んっ……っ、ぅぁぁ……？　出すって、何、を……？」

「精液に決まってるだろ！　お前の中に、ぶちまけてやる！」

「ぅっ、ぁ、いやあぁぁぁあぁぁっ!!　だめ……出すな、っ……それは、だめぇえええぇぇえぇっ!!」

男の絶頂。それは、精液の射出を伴う。

私と繋がった状態でそれが行われたら、私の膣内に、男の汚れた欲望の塊が、流し込まれることになってしまう。

嫌悪感が私を包む。それだけは、絶対に許されない。

「やめ、ろぉぉ……！　んぁっ、ぁぐぅぅ……抜きなさいっ……！　中には、出すなぁ……！」

ぞぐじゅっ！　ぞぐじゅっ！　ぞぐじゅっ！

男は夢中で腰を振り続けている。私の声は聞こえているのかもしれないが、届いてはいなかった。

やがて、トドメの一撃とばかりに男が勢いよく腰を叩きつけ、その直後――

「ぅっ……ぁ、ぁ、ぁ――いやあぁぁあぁぁぁぁっ!!」

ぶしゃあぁぁぁぁ！　と、ペニスの先端から液体が撒き散らされた。

どくどくとペニスが脈打っている。噴き出した液体は瞬く間に私の膣内を埋め尽くしていく。

（精液、出てる……これ、熱い、っ……！　ぁぁ……私の中が、汚されていく……！）

やがて射精を終えた男は、満足したようにペニスを引き抜いた。

膣内から、愛液混じりの精液が垂れ落ちる。

「ふう。魔法少女、よかったぜ」

「ぅっ、ぅ……くぅぅ……このぉぉ……中で出すなって、言ったのに、っ……！」

「何をそんなに睨んでるんだ？　魔法少女は変身中に中出しされても妊娠しないんだろ？　だったらいいじゃないか」

男はまったく悪びれることなくそう言った。

（そういう問題じゃ、ない、っ……！）

男の一方的な欲望をぶつけられ、身体を汚されたこと。それがどれだけ苦痛なことなのか、この男には分からないのだ。

男は既に、私への興味を失っていた。ちらりと私を一瞥してから、その場から去っていく。自分さえ気持ちよければそれでいいということだろうか。

「よし、次は俺だ」

「ひっ……い、いやぁ……もう、いやぁ……！」

別の男が、私の脚を掴み、勢いよくペニスを捻じ込んだ。

「ぁぎっ、くひぃぃんっ……！　ぅぁっ、く、んぁあぁぁぁぁっ……！　また、挿れられて、っ、くひんっ！　んっ、くぅぅ、ぁあぁぅぅぅぅっ……！」

じゅっぽ！　じゅっぽ！　じゅっぽ！

男は嬉々として腰を前後に振る。太いペニスが膣奥を叩き、痺れるような快感が湧きあがった。
「んぁっ、ぁ、ぁ、ぁぁぁぁ……っ、くひゅぅ、っ、んっ、ぁ、く、ぅぁあぁぁっ……」
（激しく突かれて、奥までドロドロにされて……また感じてしまう……！　もう、感じたくなんて、ないのに、っ……！）
私をいやらしい目で見下ろす男達は、まだ何十人もいる。この男達の欲望の全てを受けなければ、この地獄が終わらないのかと思うと、気が狂いそうになる。
私の魔力が尽きるのが先か、男達全員に犯されるのが先か……どちらにせよ、この凌辱はまだ始まったばかりなのだ。
「もう待ちきれないぜ。俺はこっちを使う！」
その時、１人の男が私の頭側に回り込むと、股間のペニスを露出させた。
「っ、ぁ……？　そんなもの、見せる、なぁ……！」
仰向けになった私の顔の真上に、男のペニスがある。血管の浮き出たグロテスクな肉の棒。至近距離で目にするのはこれが初めてだ。
（まさか、この男、ペニスを、咥えさせるつもり……？）
そのまさかだった。男は私の顎を掴むと同時に腰を突き出し、ペニスを私の口の中に捻じ込んだ。
「っぷ、ぐ、んむぅぅぅぅぅぅっ!?　んぐ、んんっ!!　んぐぅむきゅぅぅぅぅぅっ!!」
口の中を肉の棒が通過する。じゅぶじゅぶと、唾液がペニスと絡んで淫らな水音を発した。
（こんな汚らわしい物を、咥えさせられている……！）
「んぐ、んぐむっ、ぐ、ぷじゅるぐっ！　んくっ、ぐ、むぐるちゅぅぅ……！」
男は腰を振り、口の中をペニスが行き来した。口の中を異物が埋め尽くす感覚を拒絶する一方で、口内を擦られる刺激すら心地よく感じているという事実に気づく。
（紋様のせいで、口の中も敏感になって……ペニスを咥えさせられて、感じている……？　こんなの、嫌なのに……苦しいのに……私の身体、感じてしまう……！）
「っむぅぅ……んんっ、ぐ、ふじゅぐぅぅぅぅっ!!　んっ、れじゅっ、ふぐ、ん、ちゅれぅじゅっ！　んぐむっ、んっ……んみゅぅぅぅっ……！」
じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ……！
ぎゅっぽ！　ぎゅっぽ！　ぎゅっぽ！
膣内と口内。２本のペニスが暴れ回り、私の性感は否応なしに高められていく。乳房への愛撫も続けられおり、あらゆる快感が私の身体の中でごちゃまぜになっていた。
「んぐ、っぷるじゅっ……！　ん――くぷゅぅぅっ、ちゅぐ、むっ、ぷぐぅぅぅぅぅぅっ……！」
（だめ、っ……身体中疼いて、もうどうしようもない……！　胸も、お腹も、口の中も、全部っ、気持ちいい……）
そして、快感が弾ける。抗えない絶頂の波が、私を覆い尽くす。
「んぐぅぅぅぅぅっ!!　んん――っ!!　んぐっ、んっ、んひゅぅぅぅぅぅっ!!　じゅむっ、ぐ、むぐぐぐっ……んっ、んんっ――んぎゅぅぅぅぅぅっ!!」
視界が真っ白になり、意識が浮遊感に包まれると、私は自分の姿勢がどうなっているの

か、認識できなくなった。気持ちいいという感覚だけが体内で反芻され、凌辱されているという状況すら、些細なことに思えてしまう。

「っぐ、ん、ぐ……むじゅれぅ……っ、ぶぐ……む、ぐむぅ……」

このまま眠りにつきたい。そんな衝動に駆られ、私は目を閉じた。しかし、

「……んごぐじゅっ！　んっ！　ぐ、ぷるぐじゅぅぅっ!!」

膣と口の奥深くにペニスが突き入れられ、私は覚醒を強いられた。

じゅっぐ、じゅっぐ、じゅっぐ、じゅっぐ！

ぐじゅ、ぐじゅ、ぐじゅ、ぐじゅ……！

男達は快感を得るため、腰を振り続ける。その欲望に晒されているうちは、気を失うことなど、許されなかった。

「ふみゅぅぅぅぅっ……んぐ、ぷじゅるっ……んっ、ぐ、むぐぅれぷぅ……んっ、ぐ……むくぅぅぅ……」

（だめ……イったばかりなのに、またすぐ……気持ちよくなるぅ……もう、やめろぉ……でないと、本当に私、おかしくなる……）

激しい前後からの抽送に、瞬く間に性感を高められていく私は、絶頂してさほど間が空いていないというのに、既に達する寸前まで追い詰められていた。

そこへ、

「限界だっ！　出すぞっ！」

「俺も、出してやる！」

２人の男が叫ぶ。体内のペニスが射精に向けて、ぶるぶると震えながら膨れ上がっていく。

（だめ、私もイきそうなのに、今出されたら、私、壊れてしまう……！）

「ふみゅぅぅぅぅっ！　んぐ！　んぐぅぅぅっ!!　ん――っ！　ぷるじゅぅっ、むりゅぅぅぅぅっ!!」

「出るっ！」

「くらえっ！」

「ぐぶぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!!」

精の濁流が放たれると同時に、私も性の頂へと達した。

熱い液体が、口の中と膣の中を満たしていく。絶頂により震える膣に精液を流し込まれ、絶頂の快感が一回りも二回りも大きくなる。

「んぐ、ぐぶ……ぶぐぅ……」

びくん、びくん。

制御しきれない量の快感に襲われた私は、机の上で何度も身体を跳ね上げた。

初めて口にする精液の味。甘さと苦さが入り混じったような奇妙な味。あまりの生臭さにむせかえりそうになる。

ずるり。２本のペニスが引き抜かれると、

「がほっ！　ごぉおぉっ……！　ぐっ、がぁっ……！　ぐほっ、げほっ……！」

私は口に含んだ精液を吐き出す。撒き散らされた精液が逆さになった顔に飛び散り、頬や額を白く染めた。

股間からも大量に注ぎ込まれた液体がびちゃびちゃと噴き出している。

「ぁ……が……ごっ、ぅぅ……ひぐっ、ぁあぁ……」
「俺の番だ！」
「っがあぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
ぞぶり、と、再びペニスが肉を引き裂いた。
情け容赦ない男の挿入に、私の心は、ついに限界を迎えた。
「いやあぁぁぁぁぁっ!!　んぁっ、ぁ、ぎひぅぅぅぅっ!!　もういやぁあぁぁっ!!
だめ、だめ、だめえぇぇぇぇぇっ！　もう私を犯すなあああぁぁあああぁっ!!」
私は髪を振り乱して絶叫した。そんな私に、頭上の男から声がかけられる。
「うるさい」
「っぷぐぅぅぅぅぅぅっ!?」
私の口を、ペニスが塞いだ。またしても、前と後ろの両方から、激しいペニスの突き入れが行われる。

「んぶるぐっ！　んむっ、ぐ、ぶじゅりゅぅぅぅ！　れぅむっ、ぐぶぐぅぅ……んむぎゅぅぅぅぅぅっ!!」
ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐっちゅ……
じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！
どんなに酷い扱いを受けようとも、男達の抽送によりもたらされるのは〝気持ちいい〟という感覚だった。
「ぅんぐむぅ！　ちゅぐっ！　れじゅむっ！　んっ！　ぐぶむぅぅぅっ！　んっ、ぶ、

ぐるみゅぅぅぅぅっ!!」
（私は魔法少女……こんなことで、負けな……負け……負け――あああぁぁぁぁっ!!）
絶頂により、私の意志がかき消される。
男達による凌辱は、絶え間なく続いた。

ちゅぐっ！　ちゅぐっ！　ちゅぐっ！
「ぁむぐぅぅ……！　んっ！　ぐぷぅぅ……んぐ！　ちゅりゅ、む、むぐ、っぷぅぅぅぅっ……！」
「おらあっ！　もっとまんこ締めろ！　乳首ねじ切るぞ！」
「んんんんっ！　んぐっ、ぐ、ぅれぅぷっ……！　んっ、んぐぅぅぅぅっ、ぷじゅるぐ！　むっ、ぐ、ぐりゅじゅぅぅ……！」
「よし、いいぞ！　いい締まりだ！　うっ、出すぞっ！」
「ぶるぐぅぅぅぅぅぅぅっ!!」
男の精液が、膣内に撒き散らされた。

ぐっちゃ！　ぐっちゃ！　ぐっちゃ！
「ぁっ、ぁぅ、んっ、くぁあぁぁぁぁぁっ！　ぁっ!!　んぁぅぅ……！　お腹、気持ちよすぎて、んぁっ、頭、おかしく……っんんんっ!!　くぁあぁぁぁっ!!」
「この淫乱魔法少女が！　犯されて感じるくせに、正義の味方のフリをするんじゃない！」
「ちが、っ、くぅぅ……！　私は、淫乱じゃ、っ、ないっ……ぁ、ぁぅぅぅ……！　これは、ルカンダに、感度を……っ、ぁ、ぁあぁぁっ、んぁあああぁぁぁっ!!」
「口答えするんじゃない！　ほら、中出ししてやるぞ！　イっちまえ！」
「ぁっ、だめ……っ、ぁ、ぁあぁ、イくっ！　んんっ!!　イぐぅぅぅぅぅぅぅっ!!」
膣内に射精され、私は絶頂した。

じゅっぐ！　じゅっぐ！　じゅっぐ！
「むぐ、ぶるむぐっ……んっ……っ、がっ……はぁ、はぁ……もう、限界……もう、やめ――っぷりゅぅぅぅぅ!?　んっ!!　ぐぷぅぅぅぅっ!!」
「こいつ何か言ったか？」
「もっと犯してくださいってさ」
「だったら望みどおり突いてやるよ」
「んぐっ、む、ぶぐ……！　っ、れぅ……じゅる、む、むぐぅぅ……んっ、ん……じゅぶ、ぐりゅぅ……」
「変身中は孕まないんなら仕方がない。全身にぶっかけてやるぜ！」
「んっ!?　ぐ、りゅぐっ……！　んぐぅぅぅぅぅぅぅっ!!　っ、ぷぁ……！　ぁ、ぁぁ……精液、かけられて、ぅ、ぅぁぁぁ……」
男が放った白濁液が、私の身体を汚した。

ぎゅっぽ！　ぎゅっぽ！　ぎゅっぽ！
「ぅっ、ぁ……ぁぐ……んっ……ぅぁあぁぁっ……また、イくっ、イって、りゅぅぅ…

…ぅぅ……わらひっ、んぐっ、もう、りゃめぇ……っ、ぁぐ、んっ、ぁ、ぁあぁぁ……イぐ、イっ、ぐぅぅ……！　イきっぱなしに、なってりゅぅぅ……」

「随分だらしない顔になったじゃないか。もっとだ！　壊れるまでイき続けろ！」

「ひぐぅぅっ……やっ、ぁ、んくぁあぁぁ……！　ぁ、っ、だめ、んっ、だめぇえぇぇ……またイくっ、イって、んぁあぁあぁあぁぁぁっ!!」

「まだまだ後に控えているからな、俺はそろそろ出すぜ！」

「ひぐぅぅぅぅぅぅっ!!　また出されて、んっ、イぎゅっ、イぎゅ……イぎゅぅぅぅぅぅぅっ!!」

絶頂。射精。絶頂。射精。絶頂。絶頂。射精。絶頂。絶頂。絶頂……

肉欲の宴は、まだ終わらない。

「こひゅぅ……んぶぐぅぅぅぅっ!!　んぐっ、ぶ、ぐりゅじゅっ！　んっ……ぐ、ぅぐぐぐ……っ、ぶ、んっ、がっ、んきゅぅぅ……！　ぁぐ、っ、ぐぁあぁぁっ……いや……またイ――っむぅぅぅぅっ！　ぐぶぅぅぅっ!!　んっ、んんっ！　んっ……きゅ、じゅれぅ、っ、ぶじゅ……んっ……ひぅ、っぁ、はぅぅぅんっ……もう突くな、っ、ぶりゅむむっ!!　んっ、ぐ、ぶじゅぅぅ……！　ぐ、んっ、ひゅ、ぐ……ひゅぐっ、んっ、ひゅぐぅぅぅ……！　ぐ、んっ……んぐ、ぶ、ぶりゅぐ、れぅ……む、ぐぬむっ……ん、んぐぅぅ……ぐ、ぐぶぅ……っぱ……！　はぁ、はぁ……っ、んぐぅぅぅぅ……んっ……ん、んぐ、ぶりゅぅぅ……んっ……む、むぐ……れじゅりゅぅ……んっ……ぐぶぐっ……！　ぁぅぅ……イきゅぅぅ……っぁ、ぁ……また出され――ぶるりゅぐっ……む、ぐ……ぐむぅ……んっ……んぐ……んんっ……ん――ぐ……じゅりゅぅ……ぐ……んっ……くぅぅ――　――っぐ、ん……っ……　……ぐじゅ……む……れぅ……んくぅぅ――　――んっ――　――ん……　……」

私は目を開いている。

しかし、その瞳には、もう何も映っていなかった。

6

男達は入れ代わり立ち代わり私を犯した。

胸を揉まれ、乳首を抓られ、口内を蹂躙され、膣内を抉られ……私は絶頂を繰り返した。

そして彼らは、何度も何度も、私に精を放った。時には膣内に、時には全身に、彼らは欲望を撒き散らす。

私を犯していない男達も、湧き上がる欲求を抑えきれずに、自らの手で股間の肉棒を擦り、快感を得ていた。それにより達したことで放たれた精も、私の身体に白い穢れを刻んでいる。

今や私の全身が、白く染め上げられていた。金色の髪、薄紫色のスカート、そして肌……それらのほとんどが白い欲望の海に沈んでいる。

私の身体に付着していた怪人の粘液と、男達の精液が混じり合い、私の身体はぐちゃぐちゃになっていた。
「んっ……ん――っ、ぅぁっ！」
擦れた声を洩らしながら、私は絶頂する。
その時、私は感じた。私の体内に残った魔力の最後の一滴が、吸い取られてしまったことに。
（魔力が……全部……なくなって、しまった……）
すれはすなわち、魔法少女の力を全て失ってしまったことを意味していた。魔力がなくなった今、たとえステッキを取り返せたとしても、戦うことはできない。
魔力を補充できないこの世界では、魔法少女としての私は、終わりを迎えた。
（変身が、解ける……）
私を包む魔法少女の衣装が淡い光の残滓となり、消えていく。頬にかかる髪の色が、金色から深い青色へと戻っていった。
後に残ったのは、変身前から身に着けていた黒い胸袋と下着だけ。胸袋は首元までずらされ、下着は片方の脚に丸まって貼り付いている……無残な状態だった。
魔法少女の衣装を失ったことで、衣装に付着していた精液が直接私の肌に張り付く。
私の変身が解け、男達がざわめいた。私への責めが中断される。
「あらあら？　もしかして、魔力がなくなっちゃったの？」
ルカンダがわざとらしく私の顔を覗き込む。
「くっ、ぅぅぅ……」
私は弱々しくその顔を睨みつけた。しかし、いくら睨んでも、ルカンダに奪われた魔力は返ってこない。
「最強の魔法少女も、こうなったら終わりね。ふふふ。とってもいい気分よ」
私は最悪の気分だった。
信じている仲間達の期待を裏切り、遠い異郷の地で果てる。これ以上無念なことがあるだろうか。
「ルカンダ姉さん。変身が解けたってことは、もう終わりですかい？」
魔力を全て失った私は、ルカンダにとって用済みだろう。
私はこれから、ルカンダに殺される。そう思った。しかし――
「終わりじゃないわ。あなたたちの気が済むまで、犯しちゃいなさい」
「えっ!?　いいんですか？」
「いいのよ。この魔法少女は、自力では魔力を回復させられないから、もういらないの。壊しちゃっていいわよ」
男達から歓声があがった。
「……ぁ、っ、ぁぁ……」
確かに私は用済みで、殺されるのだろう。だが、ひと思いに楽にしてはくれないらしい。
私はこれから、大勢の男達に犯され、嬲られ、死ぬまで玩具にされるのだ。
「い、や……そんなの、だめ……」
「次は俺が挿れるぜ！」
「っ、だめぇぇぇ……んひゅうぅぅうぅぅっ!!」

突きささるペニス。
敏感な私の身体が、びくんと跳ねた。
凌辱が、再開される。
じゅぐぶっ！　じゅぐぶっ！　じゅぐぶっ！
「ひぎっ、んっ……ぁ……ぐぅぅ……ん、ぐ、みゅぅぅぅぅっ……！」
勢いよく繰り出される抽送に、快感は爆発的に高まり、
「だめ、っ、ぐ……ぁ、ぁぁ……！　もうイくっ……んっ……！　く……んきゅっ……イ――くぅ――んぁぁぁぁぁぁぁぁっ……！」
快感に震える私に、男達が再び群がってきた。
ほとんど全裸の私を、男達の手が、ペニスが、もみくちゃにする。
「んぐっ、ぶ、ぐみゅぅぅ……んっ、ん……ぐじゅっ、ちゅ、むぎゅぅぅ……」
私が、感情のない肉の人形に造り替えられていく――

「ぐむぐっ、んっ、ぐっ、じゅっ、ぐっ……！」
「おいお前、何回犯った？」
「ぎぎゅぅぅ……！　んっ!!　んじゅりゅれぅ……！」
「俺は３回だ。順番回ってくるのが遅いけど、その分回復する時間にできるぜ」
「っぁぁぁぁぅぅ……やめ……やべれ……っぁ、ぁぁぁぁぁ……」
「こいつエロいし、見ているだけでまた勃起してくるぜ」
「はぅぅぅ、んっ、ぅぅ……ぁ、っ、ぁ、ぁぁ……」
「でも、犯しすぎて、まんこユルユルになってるぞ」
「っ、りゅれぅ……！　んみゅぐ、ぶ、ぐぐぅ……！」
「大丈夫。ケツを叩くか、乳首を抓れば、多少は締まるようになる」
「んっ、ぐぶりゅぅぅっ！　ん、ぐ、んぐぅ……！」
「おっ、本当だ。これでまだ楽しめるぜ」
「っぁぅぅ……イぐ……んっ、イぐぅぅ……」
「この魔法少女、イきすぎだろ。一体何回イったんだろうな」
「んぁ……はぅぅ……また中で、出て……妊娠しちゃ、んっ、ぅぁぁぁ……」
「数えてないけど、１００や２００じゃないよ」
「じゅぐ、ぶみゅぅ……！　んっ、ん――んんっ！」
「イきすぎて、ずっと身体が痙攣してやがる」
「ぁっ……だめ……もうやめ、んんんっ！　ぁ、んぁぁ……」
「びくびく震えると、振動がチンポに伝わって、すげえ気持ちいぞ」
「うぁぁぁぁ……！　奥、気持ちい、んっ、またイくぅぅ……！」
「そうなのか？　俺も試してみてえ」
「ぁぁぁぁ……ぅぁぁ、また中に、精液……ぁ、ぁぁ、ぁぁぁ……」
「お前はさっき、顔にぶっかけたところだろうが。順番守れよ」
「……ぁ、ぐぅ……イ、ぐぅ、また……イっ、でるぅ……！」

「俺の番が回ってくるまで、壊れるんじゃねえぞ」
「うぁああぁ……！　ん、ぁああぁぁ……！」
「もう壊れてるよ。壊れていても、オナホとして使えればそれでいいけどな」
「イぐっ、イ――く……んぁ……う……！」
「そうだな」
「……あ、ぁ……イぐぅうううぅぅぅっ！」

びくびく、びくん！
大きな絶頂に呑まれ、私は男の上で身体を激しく揺らした。
「が――はぁ……ひゅ――っ、くひゅう――」
男達の欲望は、まだ尽きそうにない。

ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐっちゅ……
「んっ、ぁっ、ぁ……ぁぅ……んっ……くぅう……ぁ、ぁぁ……」
（ああ、気持ちいい……また、イく……）

じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！　じゅぶっ！
「むぐ……ぐ……ふぐ、っ……じゅぐ、じゅ、むぅう……」
（口も、胸も、あそこも、全部、気持ちいい……）

ぞじゅっ！　ぞじゅっ！　ぞじゅっ！　ぞじゅっ！
「ぁ……んぁ……ぐ……ぁ――んぁ、っ……」
（気持ち、いい……イく……イくぅ……）
ずぶぐっ！　ずぶぐっ！　ずぶぐっ！　ずぶぐっ！
「……　――　……んっ――　……」
（……　――　……　――　……）

凌辱は続いている。

7

それは突然起こった。
何かが割れるような音が聞こえると同時に、室内の照明が全て消え、辺りを暗闇が包んだ。
「な、何だ！」
「暗くなったぞ！　何も見えねえ！」
男達が慌てている。
「落ち付きなさい！　明かりを消したのは誰!?」
ルカンダが叫ぶ。そんな彼女の目の前に、１つの影が降り立った。
「……！　お前は！」
暗闇と共に現れた謎の人物は、ルカンダの腕を叩いた。それにより、ルカンダが手にしていた私のステッキがこぼれ落ちる。謎の人物はそれを掴むと、私の傍まで駆け寄ってきた。
「跳びます」
若い女の声だった。
その人物は精液まみれの私の身体を抱えあげ、男達の群れを飛び越えて建物の外へと脱出する。
「追いなさい！」
ルカンダがそう叫んだ時には、私達は別の建物の屋上に移動していた。屋上から屋上へと、連続で跳躍し、ルカンダ達がいる建物からみるみる遠ざかっていく。
「お前、は……？」
金色の髪、純白と桃色で彩られた衣装。その衣装に、どこか懐かしい感じを覚えた。
「魔法、少女、なのか……？」
私の問いかけに、その少女ははっきりとした声で答えた。
「はい。私は魔法少女ノーブル・ローズ。あなたの味方です」

（つづく）

あとがき

この度は本作品をご購入いただき、誠にありがとうございます。
新たに始まりました、「魔法少女アルフェリカ」シリーズ。本作はその１話目になります。
異世界では百戦錬磨だったアルフェリカですが、こちらの世界では勝手が違ったようです。魔力を補充できず、身勝手な住民たちに追われ、ついには怪人に敗北してしまいます。敗北後はもう、お約束の展開でしたね。１話目だからといって、エロシーンを緩くするつもりはなかったので、アルフェリカにはとことん酷い目に遭ってもらいました。本当に申し訳ない。
「魔法少女アルフェリカ」シリーズは、魔法少女ノーブル・ローズ（ＲＰＧ）の、ノーマルエンド後の物語です。ゲーム終盤、唐突に用意された「これいる？」って感じのエンディング分岐は、本作に繋げるために必要なものでした。
この「魔法少女アルフェリカ」シリーズは全４話の予定でプロットを組んでいます。本シリーズをもって、魔法少女とエビルズアークの戦いは決着を迎える予定ですので、残り３話、最後まで見届けていただけると幸いです。メインはあくまでもアルフェリカですが、シャーリーやノーブル・ローズも登場しますのでお楽しみに。
最後に、キャラクターデザインと挿絵イラストを描いていただいた有魚様に謝辞を。プリズム・シャーリー、ノーブル・ローズに引き続き、快く私の性癖にお付き合いくださったばかりか、書いた本人以上に文章を読み込み、細かな設定の補足までしていただきました。紋様重ね掛けのアイディアは有魚様からいただいたものです。いくら感謝しても足りません。本当にありがとうございます。
それでは、また何かの作品が皆様の目に留まることを願って、あとがきとさせていただきます。

2020/4/27　端音　乱希

奥付

発　　行：2020/4/27
小　　説：端音　乱希（https://ci-en.dlsite.com/creator/4576）
挿　　絵：有魚　　（https://twitter.com/_ariu0）（https://www.pixiv.net/member.php?id=6289657）
製　　作：No Future
連　絡　先：nofuture.hr@gmail.com

この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件とは一切関係ありません。
本作品は成人向け作品です。１８歳未満の方の購入・閲覧を禁止いたします。
本作品の全部あるいは一部を転載・配信・送信する行為を禁じます。